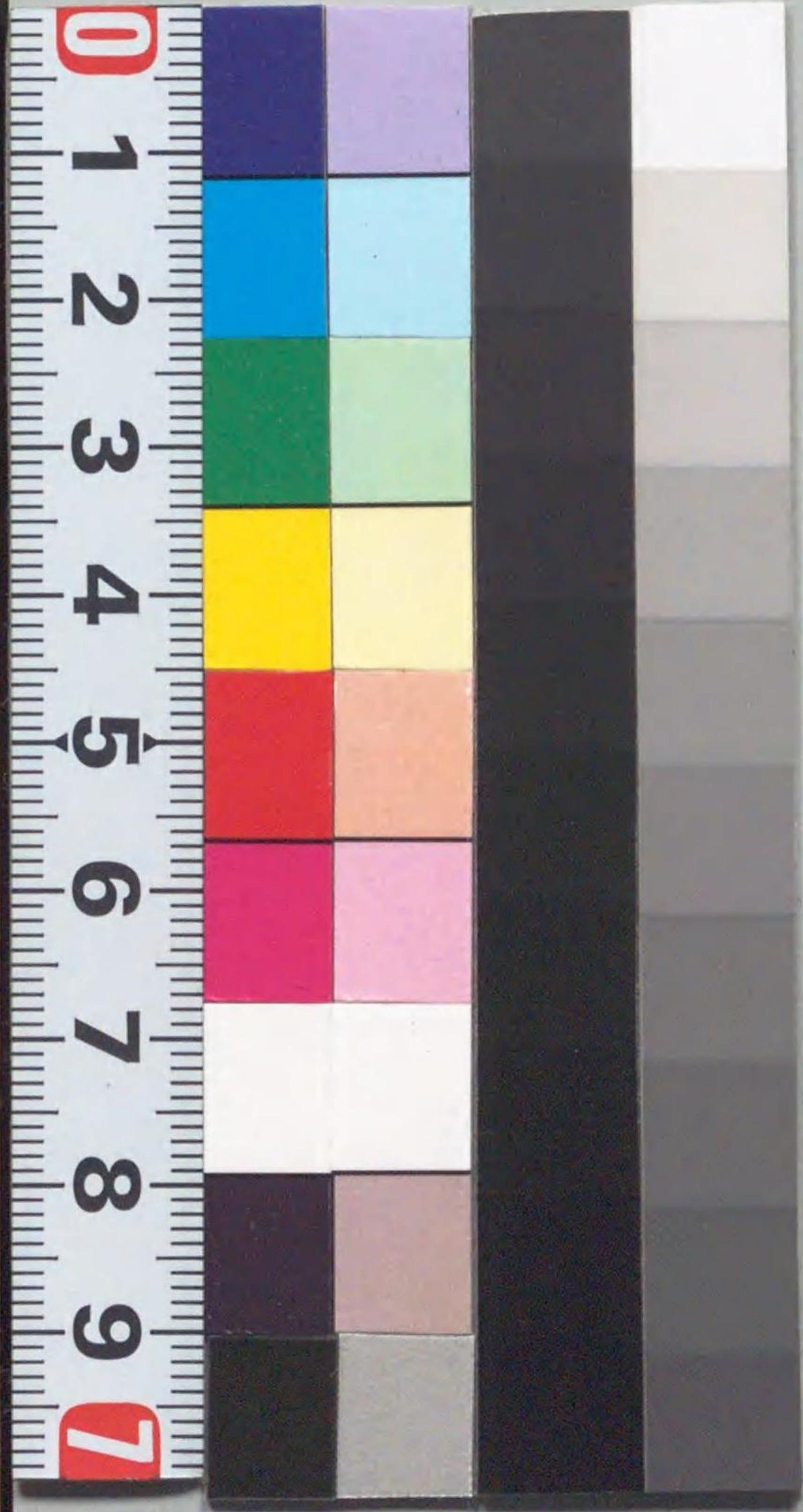


浪華人物誌卷二

281.63

0469n





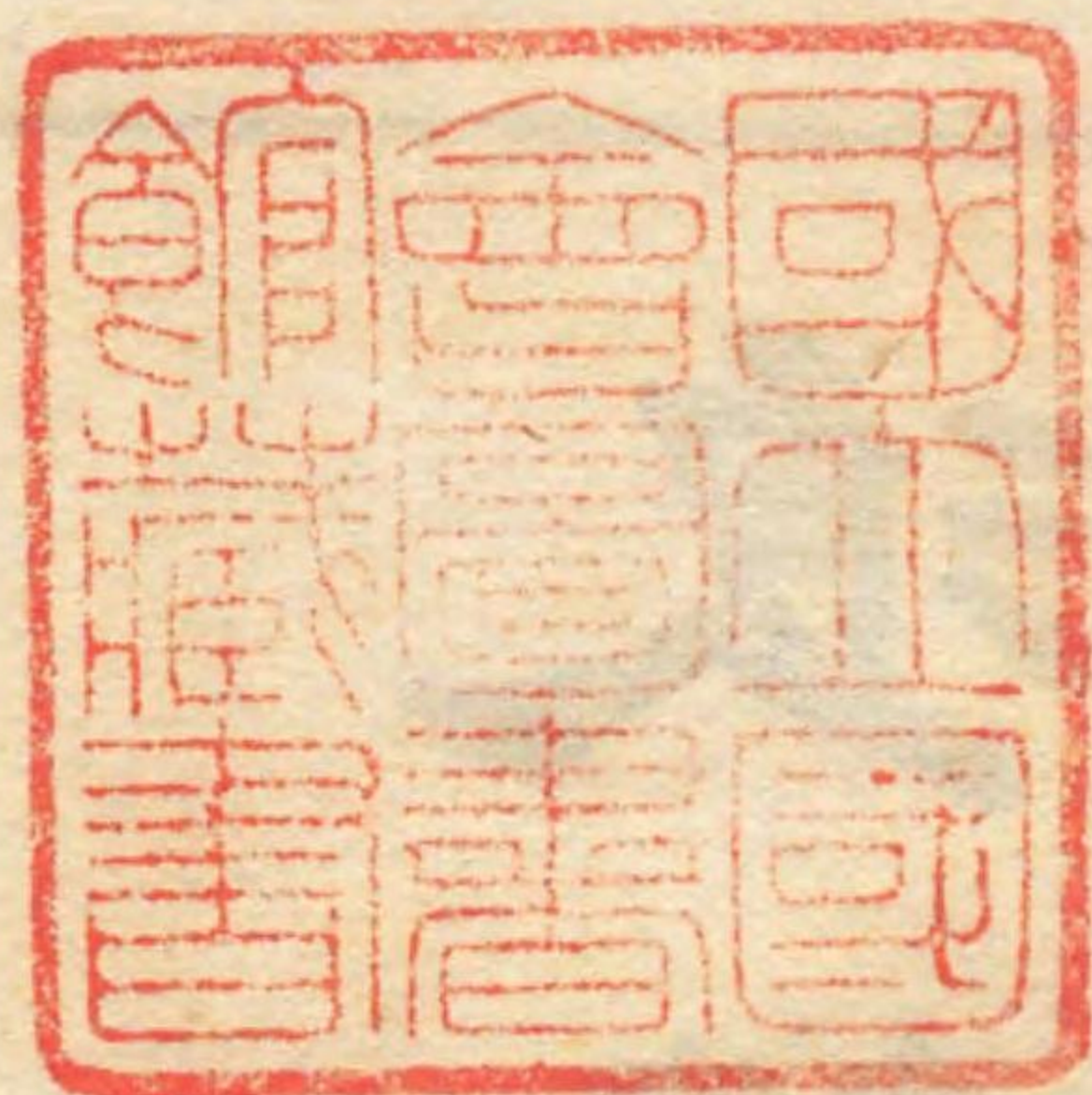
岡本撫山著



浪華人物誌 卷二

蕓苑叢書





336151

浪華人物誌卷二目次

國學家

下河邊長流	一	契	冲	五	海北若冲	五
岡西惟中	一〇	白井宗因	冲	二	壺井鶴翁	二
森川安範	一五	多田義俊	冲	一五	加藤竹里	一七
入江昌喜	一八	尾崎雅嘉	冲	一九	江田世恭	二〇
小野好純	二一	山口日向	冲	二一	川上靜菴	二一
有賀長因	二三	有賀長收	冲	二三	聖應阿闍梨	二三
聖觀	二三	橋本稻彥	冲	二三	徹山	二三
村田春門	二三	村田嘉言	冲	二三		

醫家



古林見宜	二四	稻生恒軒	三二	北山壽安	三四
北山李庵	三四	寺島良安	三九	川井立牧	三九
川井了節	三九	永德獨嘯庵	四〇	林一鳥	四五
戶田旭山	四七	足立榮菴	四九	大矢尙齋	四九
山內南洲	五一	島田淇竹	五一	田中杏亭	五二
沼嘯翁	五三	水走平岡	五四	村上玄治	五五
各務文献	五五	橋本宗吉	五八	齋藤方策	五九
原老柳	六〇	緒方洪庵	六二		
畫家					
橘守國	六六	橘保國	六六	國雄	六六
橘守行	六六	橘保春	六六	大岡春卜	六八
大岡春川	六八	小柴探春齋	六九	小柴景山	六九

林幽甫	七〇	林幽篤	七〇	牲川充信	七〇
吉村周山	七〇	櫛橋榮春齋	七一	長洲	七一
葛蛇玉	七一	山本如春齋	七二	月岡雪鼎	七三
月岡雪齋	七三	月岡雪溪	七三	蔀關月	七四
蔀關牛	七四	桂雪典	七四	耳鳥齋	七五
福原五岳	七五	墨江武禪	七六	墨江忠八	七六
墨江敬處	七六	森永春齋	八一	鼎春嶽	八一
鼎金城	八一	戶田黄山	八二	濱田杏堂	八二
林閭苑	八二	須賀尙卜	八三	一峰齋馬圓	八三
岡田玉山	八三	石田玉山	八四	岡田米山人	八四
岡田半江	八四	森周峰	八五	森祖仙	八六
森徹山	八六	春好齋北洲	八七	高田樗堂	八七



中井藍江	八七	山口重春	八八	水尾龍洲	八九
山田蘭石	八九	岡熊岳	八九	岡琴岳	八九
西竹坡	九〇	仁木五彩	九一	北英	九一
貞升	九一	上原芳豐	九二	松好齋	九二
林文波	九二	佐々木晴洲	九三	金子雪操	九三
鎌田巖松	九七	西山芳園	九七	馬舍	九八
東亭	九八	佐野龍雲	九八	曾我紹興	九八
長山孔寅	九九	長山孔直	九九	山中菁藻齋	九九
菅松峰	九九	田其相	一〇〇	竹原春朝齋	一〇〇
竹原春泉齋	一〇〇	松軒齋	一〇〇	大石真虎	一〇一
小澤梅堂	一〇一	吉野看鶴	一〇一	橫川陶居	一〇二
中村芳中	一〇二	上田公長	一〇二	上田公圭	一〇二

浦川公佐	一〇二	田中秋亭	一〇二	松川半山	一〇三
長谷川貞芳	一〇三	流光齋如圭	一〇三	朴仙	一〇三
丹羽桃溪	一〇四	淺山蘆洲	一〇四		



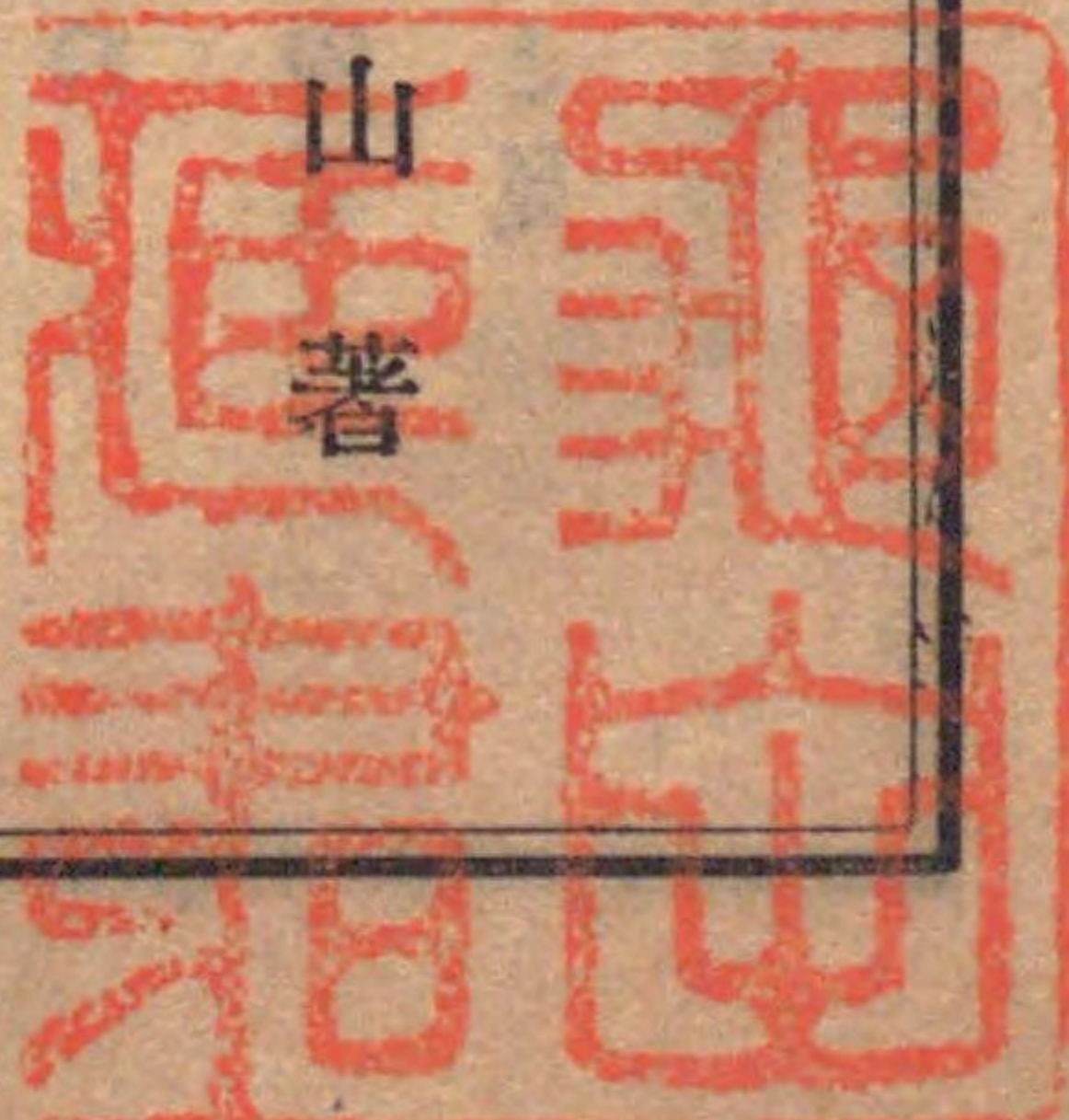
浪華人物誌卷二

國家

下河邊長流

岡本撫

山著



若き時は下河邊彦六具平と名乗り和州龍田の産父は小崎氏いかなる故にか母の氏を稱へ侍けるもとより妻子なくして中年より津の國難波のかたわらに隱居をしめ靜に書を讀中にも和歌を好み萬葉集古今集伊勞物語などは暗記したり其學問自ら傳聞るをもて大阪の富人多く弟子となれり生得世に諂はぬ人からにて心のおもむかぬ折は富家の招きにも應せず訪來れる人にもものをもいはす枕を高うして或は眠り或は書を讀みて心にまかせて過しける西山公水戸黃門光圀卿其を聞召し召けれ



とも終に從かはさりしかは紙筆を賜りて萬葉の註を請ひたまふにも心に趣きたる時は一二首つゝ註して又懈かちに侍りしまゝ果さずして貞享三年丙寅六月三日に身まかり侍りぬ春秋六十三歳圓珠菴の契冲師と交深かりければ遺稿を集めて晚華集と名つけたり其集中の歌

述懐のこゝろを

柱川こゝろをかけし一枝も折られぬ水に身は沈みつゝ

ゆつかつら仰けばいとゞ高き木のきることかたき大和言の葉

よみとよむわかことのわはあし原のうらみやせまし住吉の神

わかのうちらしらぬ板井の蛙たに聲は詞の數にやはあらぬ

和歌の浦にいたらぬまでも紀の國や心なくさの大和言の葉

末の集の歌どもの昔のうたに多くおとりゆくこと見

ゆるを

難波津の流れに生ふるあしづゝの末の世見へてうすき言の葉

契冲か山にかくれてよめる俳諧の歌に「世中にうめる心

は山柿のまつほに出てくれたけぬる哉」とよめるをききて

世をうみのへによりみてぞこのもしき其山柿のみのふれる人

その外多く歌もあれとも略す

安藤爲章云く長流の歌大かた是らの風躰なり長流は儒學まさり契冲は

佛學に深し在家出家のさまはかはりたれと清操ともに昔の隱逸にもち

とらぬ人品なりけらし

伴蒿蹊云予聞けるうちよしとおぼゆるは

下野やなすのにしける篠をとりてあつまをのこは矢にぞはぐなる

ついにわか着てもかへらぬ唐錦立田や何のふるさとの山

此立田のうたを右の桂川の歌にあはせて思へははしめは出身の望あり



しかとも其才を知る人なければおもひすて、隱士に終けるなるべしその萬葉の註語は代匠記にまゝ見ゆ又季吟拾穂抄に或説とて出されしは此人の説と覺し其流義の説のあらぬは不用とのみ書れしにかへりて道理にあたれるか多し歌の體は契冲師と此人同じ筋なり契冲十七歳の時の歌を見て才を感し方外の友となるよし契冲の徒義剛もかけり以上は近世畸人傳に載せたる年山打聞の文を轉寫せしなり但著書の目少しく足らぬ所もあれば群書一覽など参考してこゝに擧ることゝせり

林葉略塵集十萍水和歌集十續歌林良材集二枕詞燭明抄三

萬葉名寄五百人一首三奥抄二

按に畸人傳に宇田の人とあれとも契冲か晚華集の序に唐錦龍田に生れとあり又上に擧るついに我着ても歸らぬの歌を見れば龍田の人なること明かなり宇の字は傳寫の誤にてもあらんかし曉鐘成云長流の墓玉造

の東大今里邸にあるよし葛城氏の筆記に見へたれとも今廢してなし長流一號吟叟居士

### 契冲付海北若冲

名は空心俗姓は下川氏父を善兵衛元全と云攝州尼崎城主青山氏に仕ふ契冲生れて五歳其口つから百人一首を授るに不日にしてよく記得す父も亦實語教を授くるに又同じ父母驚き異みぬ七歳にして疫を患へ病癒て後出家せんと乞ふ父母許さすこれより自ら腥葷を斷て常に佛號を稱ふ父母其志の奪ふ可らざるを見て遂に之を許して程近き今里の妙法寺丰定の弟子とす時に十一歳丰定はしめ般若心經を授く讀むこと四五遍にして暗誦し且書す十三歳髪を薙て高野山に登り東寶院快賢に學ぶ賢法器として之を導き法を傳ふ一山之を稱す寛文二年檀越の請により浪華生玉曼茶羅院の住持となりしか其城市に隣りかまひすしきを厭ひ壁



上に歌を題して遁れ去り一笠一鉢意に任せて大和の諸名區に游ふ長谷に至ては食を絶ち念誦一七日室生にては煉行三七日に及ふ又高野山に登り菩薩戒を圓通寺快圓に受け持律益清修す泉州久井の里に錫を止め山水の奇を愛し住ること年有り三藏を該ね悉曇に通し自他宗の章疎及儒典詞文集に於ても涉獵せずと云ふ事なし從て學ふもの多し又同國池田川の側に屏息して日本紀以下國史舊記を読み専ら和歌を好みて廣く其書を探る延寶五年河州鬼住山延命寺覺彦に就て安流灌頂を受け儀軌二百餘卷を寫して生駒寶山寺に納む同八年本師丰定寂せり遺命して妙法寺に住持せしむ契冲もとより好む所にあらされとも其母老て此里にあるをもて己むを得ずして往きわかれに一室を寺の傍にかまへて孝養す水戸藩主徳川光圀卿萬葉纂註を撰むにより契冲を府下に招きしかとも固く辭して往かす然れとも其古義を好むを喜ひ萬葉代匠記廿卷總釋

二卷を作りて進む開卷第一首雄略帝の御歌に籠の字の訓を知らず古とよみ來れるを加太麻と訓し神代紀の無日堅間を證とす卿その卓見をよろこび且其素志に合ふことを奇とし白金千兩絹三十匹を贈りて之を勞ふ冲即寺院の修繕費に充つ且貧乏の者を賑はして一も蓄へす又古今餘材抄を著す人麻呂明石の浦の朝霧の歌古註眺望とし或は送行とせるものを非としこは家山日に遠く前程限りなき波の上朝霧朦なる間にたよふ旅情を述ふ故に紀代も羈旅部に納るとの説光圀之を読み掌を抵て千古の發明とし書を貽て一たひ來り見ん事を強ひしかとも林壑の性公侯に謁するに慣すとして遂に應せず母歿するに至て妙法寺を退き浪華の東高津に卜居す圓珠庵といふ俗客を謝絶し清修自適す光圀時に物を贈り起居を問ふと絶へす家臣安藤爲章をしてしはく往來して説をうけ事を問しむ元祿十三年十二月光圀薨す冲も翌十四年辛巳正月病に罹り



廿四日に至て病革る其徒に永訣を告ぐ且疑ふ所を正さしめ廿五日歿す時歳六十二庵後に葬る沖爲人寛厚人を愛し恭謙能く下る然も其法を論するに至ては當時有識といへとも能く當るものなしとそ其記憶の比類なきことは圓珠庵にて萬葉集を説くに古今事實援引せる所の歌詠等始より思慮に亘らすして綿々口に絶えず連珠の函を出るか如し或は人ありて古歌の記得を問ふに三千首以上知らすと云へり伴蒿蹊曰く此師の歌學顯昭法橋の説を梯として古書を見明らかめしものとおほし凡そ近世の人唯中川の流の説にあらされは道の言にあらすとす是によりて過を過にて傳ふるそ道なりといふ説さへ打おこれり此師この關を透過して一事一語微を古に取る其中或は過不及なきにしもあらさらめとひとたひこの道開けてこそ是に次ていふ人もいてきけり然れば千歳の一人と言はんも過言にあらじと契冲著述

厚顔抄

三古事記日本の詠歌童謡を註す

勢語臆斷四百人一首改觀抄三源註拾遺八

勝地吐懷篇二

河社二

類字名所補翼抄七

類字名所集九

和字正濫五

和字正濫要略二

古今餘材抄十

萬葉代匠記二十

同總釋二

雜記一

雜々記一

新勅撰集抄

一名難勅撰又新勅撰雜註三

契冲富士百首一

三十六人歌仙贊歌一

圓珠庵にある墓碣の外に五井蘭洲撰文の碑ありこれは瑩域荒蕪せしを憂へて菴主源光契冲の門人江友俊に謀り寛保三年に建る所にして冲歿後四十二年なり

海北若冲岑柏と號す浪華の人契冲の門に學ぶ和訓類林七卷を著すひろく古書を引て和訓の正字をあつめその訓を眞字にてしるし五十音を以てこれを分てり寶曆元年辛未十二月十七日歿す年七十七墓は小橋中寺町無量寺にありて大譽千之若冲居士と碣面に刻し臺石に乗水居とあり



岡西惟中

名は惟中一時軒と號す備前の人浪華に住す初め俳諧を伊勢の杉田望一に學て一有といひ後西山宗因に學ぶ又和歌を飛鳥井雅章烏丸資慶の兩卿に學び和學をも爲し書を善くせり其歌の中にて

身ひとつはさもあらばあれたらちねの老にはつらき年の暮かな

此歌孝心の姿ありて世に傳へ名高し又發句

上元や松にはしめて春の月

とく散て見る人歸せ山櫻

一とせ旅行夏に逢て

帶涼しいまた旅なる衣替

元祿五年に歿す著書

枕艸紙旁註五

徒然草直解十

砂金艸紙四卷原名一時軒隨筆

續無名抄三

和歌秘密抄

清閑雜記

名所題林五

惟中の妻園女は勢州松坂の人性質風流にして和歌を好み又同國人美津女を師として俳句を學て其佳境に入る惟中浪華に在し頃夫妻となる夫死して節を守る元祿七年芭蕉浪華に來り園女に招かれ白菊の目にたてゝ見る塵もなしの句を吟じて其貞潔を稱す後江戸に行き眼科醫を業とす享保八年六十歳にして名を知鏡と改め安藤對馬守(名は信友俳號冠里)の母夫人に仕へ同十一年四月六日六十三歳にして歿す其俳句

夜あらしや太閤様の櫻狩

手をのへて折行く春の草木哉

負ふた子に髪なふらるゝ暑さ哉

有程の伊達し盡して紙子かな

又辭世



秋の月春の曙見し空は夢か現か南無阿彌陀佛

### 白井宗因

浪華の人白雲山人と號す醫を業とし國學に精し其著書の中神社啓蒙の林道春の神社考にまされる事遙にして其凡例に神代卷も實に採へき事は二三策のみと書たり此頃までは公家の記録たやすく見る事のならざる時なり若し此人をして今の世に生れしめは大に故實をさぐり得て天下の木鐸となれる人かと多田義俊云へり寛文頃の人なりと云著述

神代卷私説 中臣祓白雲抄二神社啓蒙八職原抄句解十二神社便覽一

### 壺井鶴翁

名は義知字は子安或は子海に作る俗稱は安左衛門鶴翁又温故軒と號す父を道意と云ふ三池氏の嗣となり壺井氏の女を娶て鶴翁を河内國河内郡辻子村に生む幼名牛松丸才敏にして群兒に殊なり一邑之を奇とす十

四歳にして父を喪ひ母氏の養を受け壺井氏を冒す浪花に出て筒井白雲氏を師として書法を學ぶ師其手妙神に入るを驚き凡人にあらずとし蓋奥を秘することなく盡く之を傳ふ十八九歳にして既に書を以て世に鳴る二十一歳信濃松本城下に至り止ること七年去て加賀に往き金澤に遊ぶ事三年皆書を以て祿を永めんと欲するに在り一日職原抄を讀みて歎して曰誠に天下の禮をまなふもの誰か官職を明にせずして其用を成んや書を以て仕ふるは大丈夫の志にあらずと遂に故郷に歸り其意を諸氏族に告げ二十九歳にして京都に赴き四辻少將に仕ふ少將此時伏原宣通卿について古書訓讀の法を習ふ鶴翁陪從してともに之を學ぶ鶴翁後までも此縁故を忘れず伏見家に對して門生と稱せり既にして思へらく年三十にして志始て定まるべきにいかてか衆と同じからんと夜學して全く寢ること四年にして厭ふ事を知らず有識の學を練て塵務を事とせ



す凡青士の主君に従へる主君參内供奉の時は下場所に在て諸從士と雜談するのみ鶴翁其徒と群せず庭砌に蹲りて學術を思惟し故實を熟練す人これを異て交はらず鶴翁これを幸として獨なるふ三十二歳にして始めて裝束拾葉二卷を著して梓に鋳む四方の學者競ひ求めてこれを珍とす三十四歳の時鶴翁を師とし仕ふるもの三十餘人其後仕を辭し門を開て問者に應ず居を移す事數回後浪華に卜居す鶴翁の學故きを温め新を知るをもつて宗とす八條少將温故の二字を書して貽る以て軒號とす著す所の書八百卷一も無根に出つるものなし門に及ぶ者二千餘人其堂に登るもの三十餘人室に入るもの六七人一たひ職原抄辨疑を世に行ひて後世の鶴翁を議するもの皆伏す名譽鳳闕槐門に聞え晩年江都の徵命有りしより其聞愈大なり有識の中興と云へり享保二十年十月廿四日歿す年七十九城東清光寺に葬る子喜藏民房

著述

建武年中行事頭書 枕艸紙裝束抄一裝束要領 昔傳拾葉五  
源氏男女裝束抄三紫式部日記傍註二職原辨疑 職原抄通考廿一  
故實秘要抄二昔傳拾葉提要一官職浮說或問一衣紋愚童訓一  
當時諸家官位昇進次第一裝束文飾雜談抄一

森川安範

播州田野村の人弱冠大阪に移住す人と爲り卓犖不羈俠者の風あり財を輕し義を重んず人の急に趨く己れの事より甚し人稱して長者とす大祓解を著す葛城慈雲和尚の父なり

多田義俊

南嶺又秋齋と號す攝津の人業を壺井鶴翁に受け有職故實を研究す博覽多通の聞あり後鶴翁と隙ありて一家をなせり此人名を換るの癖あり諸



書及自書に署する所を擧ぐれば初名利見と言ひ享保九年政仲と改め享保十六年より寛政元年頃は義俊と署し寛保三年には義寛延享三年には満泰同四年には武起寛延三年三月には秀樹とあり即ち歿年なり又通稱も進藏兵部將監左衛門と度々換へ氏も多田又桂と署せり俳諧をも善し男鈴と稱して半時菴淡々と友たり寛延三年庚午九月十二日京師にて歿す享年五十三二條河東本妙寺に墓あり其著述百三十五部と云へり其内

秋齋閑話四

ぬなは草紙三

南嶺子四

南嶺遺稿四

游和艸二

續游和艸二

神明憑談二

宮川日記二

政實纂要

一名故實  
千個條四

鳥追歌註

日本書紀或問私考二  
神璽辨一

神拜恐惶抄一

創禊辨一

葵祭記一

直字辨一

三種神器辨書一  
獸肉論一

日本紀神代卷口義十

神代卷秘要抄二十  
中臣祓氣吹抄三  
御昇壇記一

三十箇條故實辨一

舊事紀偽撰考一  
三紀辨一

職原抄辨講二十  
以呂波聲母傳一

以呂波訓義一  
本語口傳一

ちかや艸一

### 加藤竹里

名は景範字は子常其號は竹里通稱小川屋喜太郎晚年友輔と稱す浪華の人賣藥を業とす天資温粹父母に孝にし弟に友家を治むるに勤儉其業大に興る而して自ら奉する泊如たり夙齡學を好み尤和歌和文を善す漢籍を懷德堂に學ひ詩文に巧なり書法を三宅萬年に受け假名字を富永仲基に學ひ頗る妙なり寛政八年丙辰十月十日歿年七十七蛇坂珊瑚寺に葬る碑文は中井竹山撰又別に遺物を高津法雲寺に埋み碑を建つ著述

和歌虛字考一

和歌實踐集五

濱苞一

名所續松一

藏山集

水馴棹

萬葉趨避

國雅管見

古今通補

源語解

和歌和文集



入江昌喜

通稱榎並屋半次郎長翁又俊猊子と號す浪華の人少より喜て本朝の書を讀み既に長するに及び一日慨然として曰丈夫世に處する名を文武に擧ぐへし何を岌々市井の業を守らんやと之を兄節休に謀る節休未だ許さず幾程もなく病死し其子も天せり昌喜嘆して曰我をして市井を免かれしめさるもの亦天命也と之より家業を勉むると二十餘年にして其産を義子に授て高津に隱居し其居を幽遠窟と曰ふ自謂ふ今より讀書の業を續くへし但年半白を過ぎ餘生幾も無きを如何せん然れとも夜を以て日につかは十年にして二十年なり尙くは我志成るあらんと是より研精十餘年にして義子又死せり復故宅に還て其業を修むること七年業を義子に讓て再び幽遠窟に歸り更に奮勵勉學すこの時己に國學精確を以て聞ゆ妙法院法親王令旨して萬葉類葉抄を補闕せしむ寛政丁己書成て之を

進む親王序を賜て之を嘉獎す昌喜人となり温雅にして剛決言貌非凡時に江田世恭博洽を以て聞へ輒く人を稱許すされとも獨り昌喜の勉學勤勉にして成す事あるを稱せり寛政十二年庚申八月十二日歿年七十九墓は小橋寺町梅松院にあり著述

竹取物語補註三 和田津海十二 青陽唱話一 久保之取蛇美十五

異名分類抄四 榮花採葉二 葦手考一 仁德天皇傳一

本朝地名考三 萬葉類葉抄補闕十六

尾崎雅嘉

雅嘉名は有魚通稱は俊藏又春藏に作る蘿月又華陽と號す一號傳古知今堂大坂の人博覽にして和歌を善す著述數種あり群書一覽の如き其博洽を見るに足れり或云初め書肆なりと文政十年十月三日歿享年七十三墓は蛇坂春陽軒にあり清霄院石叟蘿月居士



### 江田世恭

世恭字は楨夫通稱富田屋八郎右衛門浪華の人國學を以て名あり博く本朝の典故に通し和漢の書籍涉獵せざるなし尤古書畫の鑒定を善し世に富八きわめといふ家に古書畫數百種を藏む所藏の書籍悉く朱批し和書の謄本は校正精確人に借覽せしめて少しも惜ます人之を珍重す和歌を似雲法師に學て巧なり自謂く凡和歌正路を得されは假令極巧なりとも俳歌と異なることなしと頼春水嘗て小澤蘆庵に逢て世恭の事を語る蘆庵曰く吾其博識なることを聞けとも其和歌を善する事を聞かすと春水乃ち其但馬に同游せし時の和歌を誦す蘆庵驚て曰く是正風なりと世恭交道甚た廣けれとも曾て宴會の席に赴す腥物を食はす妻妾なし旅行の時も必ず數冊の書を携へ行き休憩宿泊毎に見て以て樂と爲す人目して書淫といふ嘗て菅會金湯を戲著して陳眉公の書畫金湯に擬せり著述

### 五月雨考 一卷

寛政七年乙卯三月三日歿天王寺東清壽院に葬る

### 小野好純

播州の人浪華に住す國學に達し和歌根元記を著す小野好古四十二代の孫と云寶曆十三年癸未十月二日没墓は口繩坂淨春寺にあり

### 山口日向

龍雷神人と號す名字詳ならず東成郡上の宮の神職なり國學に達す明和安永年間の人墓は藏鷺菴にあり著述

礮馭盧島日記 幸神秘訣 中臣祓舊傳 神國女訓抄

### 川上靜菴

遮莫又臨江齋と號す浪華の人京橋に住す國學に悉し源氏物語斷錦十卷を著す安永天明年間の人墓は茶臼山邦福寺にあり



有賀長因 有賀長收

長因は長伯の男にして和歌に名あり敬義齋と號す京師より浪華に移住す安永七年戊戌閏七月五日没年六十七墓は高津本覺寺にあり  
長收和歌に名あり文政元年戊寅五月七日没年六十三墓は高津正法寺にあり

聖應阿闍梨

著述の書神道辨惑胡蝶菴隨筆等あり天明七年丁未四月廿九日歿生玉持寶院に葬る當今廢院となりて所在知れず

聖觀

俗稱埃宮名は神足國學に精し享和二年壬戌十二月十四日小橋に歿す年五十八墓は東成郡味原池畔に在り

橋本稻彦

中臺と號す又琴之屋といふ藝州廣島の人也幼年より國學を好み本居宜長の門に入りて其業を成し大阪に住す文化六年己巳六月十五日歿年二十九世人其短命を惜む著述の書

校正新撰姓氏錄 紫文製錦 紫文消息 萬葉梯 古今假名遣辨 讀國意考

此餘猶多しと云ふ墓は口繩坂梅舊院にあり

徹山

觀古堂と號す初名武者小路實純卿和歌の達人文政十年丁亥四月十七日歿年六十三墓は相坂一心寺にあり法號實誠院殿高入徹山

村田春門 同嘉言

春門字は玄仲田鶴舍又樂前と號す初名一柳並樹後春門と更む通稱蟹守浪華の人本居宜長の門人なり中年江戸に出て遠州濱松城主水野家に仕



ふ後浪華船越町に住し國學に名あり天保七年丙申十一月廿四日歿年七十二墓は茶臼山邦福寺にあり  
嘉言字は七郎太岳又吉葛廬と號す春門の男和歌及書を業とす

## 醫家

### 古林見宜

初名は道芥後に正温と改む字は桂菴壽仙坊と號す堂に見宜堂の額を掲るによつて世の人見宜を以て通稱とす播州飾磨郡の人なり其先具平親王より出つ祖父赤松加賀守祐村嘗て矢人函人の心を易るゆへを思惟し武をすて、醫術を行ひて人を活さんことを思ひて海を渡り明に入り炎黃の道を學ひ治法往々奇中すること多かり其纜を解きて歸るに及ひて明帝贈るに蜀錦を以てせり其五綵心を瑩き目を輝して禁方を織り成せ

り世に傳ふる錦袋子は其方なり東歸の後醫道盛に行はる晚年耕菴と號す父を蕺菴本秀と稱し亦醫術に精し見宜幼より穎悟にして見識高し嘗て過庭の訓を稟け且釋師養に従ひて書を読み壯に及ひて京師に入て建仁寺に寓居して有徳に就て益を請ふ和氣丹波の兩流に遡り醫道の妙に至り兼て丹溪朱氏を學ひ終に張仲景劉守眞李明の三家を參考して精を研き思を覃くし緊要にあたらすといふとなし其頃堀正意とともに洛西嵯峨に學舎を建たりしかば四方の學生集ること雲の如く孜々人を誘掖せしに娟疾の者ありて半途にして止めたり又尾州に至り術を施すこと三年に及び遠近の病者來り集ひ全快を得るもの擧げて數ふべからず嘗て醫學入門を閲して謂へらく其醫學の廣大闊博なること津涯なきか如し炎黃の醫方をはじめ我邦神世大已貴命少彥名命病を療するの方を定むるよりこのかた皆神聖に推本きて其仁を廣せり中頃世衰へ道微にし



て善政やうやくに廢しかくて草野に間醫を以て産業とし專利を重んず  
醫の道たるもとより其任輕からず志行なかるへからずとて醫學入門の  
末卷なる醫習規格をもて醫家の教戒とせんとして表出し専生徒に示せり  
見宜筑紫に在りし頃治驗甚多し其中に冷疾を患ふものあり夏日といへ  
ども衣を重ね爐を圍みて熾火に對して面を焦すに至れり見宜之を診し  
て云く伏熱なり經に云行水してこれを漬し其中外を和すといへり冬月  
に治療すへしとて急き槽を造らしむ親族相集りいかなる療法にかある  
と見宜を待けるに程なく見宜來り命して新汲水を其槽に湛へて病人を  
して衣を解き浴せしめんとす病人寒慄しつゝ衣を解かんとする時親族  
竊に冷疾なるを水に入れなは氣絶やせんと云あへりければ病人も亦し  
はしためらふを見て見宜怒りて君より給はれる食祿をは何とか思ふそ  
といへるに病人もはけまされて乃ち水に入り浴するに見宜しきりに水

を其頂より灌ぎかくると半時ばかりにして早程ころよければ水より出  
しけるに病人云身體の温和いふへからず水を出ることをおもはずとい  
へり猶藥を與ふること二十貼はかりにて癒ゆることを得たり身體の輕  
便前に倍せりとかや見宜晩年浪華に住せり其頃京都所司代板倉周防守  
病に罹り諸醫の治を請へとも癒へす見宜を浪華より迎へて診せしむ見  
宜診察して曰く服藥あらは快復あらんと因て旅館を命して止宿せしむ  
見宜家臣に謂へらく先藥一貼を進めて経過を見更に跡に進めんとす藥  
は旅館に取に遣さるへし一貼の價黄金一枚なれば使に持たせ越さるへ  
しといひて歸りぬ家臣その價の貴きに驚き評議の上周防守に告げたり  
周防守も其高價なるを恠めとも勢ひ中止す可からず依て引換に藥を受  
取りて之を服せり見宜來り曰藥相應せりと見ゆつゝいて服せらるへし  
とて又價を求むること初の如しかくすること三回にして疾大に快し四



回に至て最早價におよはすとて猶藥を進むること五六貼にして全く癒たりければ見宜更に四五貼の藥を調合して云へる様藥はもはや用ひらるゝに及ふましましきもあと保養の爲にさし置きまうすなり明日は暇賜はれと云ふ周防守曰今度は子の治療に依て速に全快せしこと感謝にたへず家臣いへらく子の藥には高貴の品あらん故に京醫の治する能はさる病を速に癒さしめたり隨て價も高き所以なるへしと果して高價なる藥は何と云へるにやと見宜對て曰藥品もと高貴の品なし況や君の藥に於ける一も高貴の物を用ひす周防守さては家臣のいへるに違へす吾とても善き樂故に速に癒ゆるならんと思ふなりと見宜曰ふそれは君自ら知るならん周防守吾醫に非すいかて知ることを得ん見宜然らはまうすへし先つ大阪へ拙者を迎へに遣はされしに付て京都の醫師の手に餘りたる貴恙を見宜如きの藥にて治す可きとも思はねは辭すへきと思しかと

も外ならぬ君の事なればやむを得ずして參れりさて診察するに何たる難症にあらず昨今醫をならひし者にては治すへきものを何故に京都の醫師か治す能はさりしやらんと考ふるほとに思ひ當りしはこれは君の隨意に藥を可否して或は吞悪くし或は味いかゝなとゝあるを臣屬か其意を承けて醫師に藥の加減を促しあるひは此の丸藥は効ありと云へは竊に之を用ひ或は醫師に隠して食禁を犯しさて腹が痛む下痢するなとゝ醫師を責むよりして醫師は其處劑に迷ひこれ故か彼故かと取定めかねる上に服用をも正しくせられざるよりして長引きしならんと察したり依て拙者はわざと藥の價を貴くして少しは吞にくき藥も價貴きと思はるれば自然と堪へて吞まるへし又臣屬も高貴の藥と思へは煎法にも念を入れ君へも進めて吞まるゝやうに爲す可しと謀りたり果して其の効ありて速に癒たり凡病に罹りては醫師の戒を能く守り玉へ若し拙者



の薬も等閑にせられなは遂には命にも拘はるへきに快復ありしからは三貼の代と黄金は過當にあるましく猶大阪へ使者を下され十分の謝禮を賜はるへしと打笑ひて言ければ周防守道理至極なりとて大に感稱したりき又ある諸侯見宜に問ふて云く凡手の脉を診して周身の内外吉凶を知ることはいかなる由にかあると言はれしに見宜答へていふ説は素問難經に見えたり猶近く譬を取りていは、手脉は江戸のことく方今江戸は諸侯のことく、朝宗する所なれば天下の事を知るへきの地なり手は百脉の大會する所なればこれをもつて周身のことは知るへき理りならずやと言へり又或人見宜に向ひ灸をするに悪日あり又禁穴ありと云ふことを聞く然りやと問しに随分きつとあることなりと答ふ素人にも覺へおかる、ほとこの事にやと問ふにいかにも覺へやすし悪日禁穴たゞ一つ宛なりとあれ然らは何とぞ授けられたしといふ見宜襟を正し

て其の傳授は年中にて灸すまじき日は正月元日身内にて灸すまじき所は眼玉なりと答へしと紫野澤菴和尚泉南にありし時見宜の風彩を高しとしてしは、其家を過訪して清談せしとそある時諸侯より近臣をして西洋舶來藥品の効能を問はしめしに見宜云近世蠻舶の互市するところ吾邦の人奇を好み異を尊み遠物を珍とす然れとも異域の産物その性質しるべからすそれ千金の子は堂に乗せすと云へり高貴の人何そ容易に異物を嘗むることをせんやとこたへられしとそ嘗て國史を讀みて萬國に冠たることを信し且門人をして文學を勧め且其頃唐土の醫書を梓行するものいと多かり明曆三年丁酉九月十七日泊然として逝去せり時に年七十有九豫め其子見桃に告げて云ふ昔丹溪先生享年七十八今われ一歳を増せり既に壽域に躋る葬儀は朱子家禮に據らんとおもへとも國俗に従ふへしといへり見宜の人となり言行卓異英氣外に發し嚴にして質



直なり一見してその凡ならざるをしれり富貴の人といへとも禮容を加へ薄夫懦夫もその風を欽し兒童走卒もその名をしらざるものなし門人三千餘人といふ見宜堂は聚樂町今の粉川町一丁目にありて見宜堂の額は黃檗隱元の書にして其他に紀藩祖頼宣の畫鷹大幅隱元木菴獨立等の詩卷板倉周防守の手簡を藏す皆治療を謝し或は治療を依頼紹介するものなりと今は癡絶せり惜むへし又見宜の墓は高津禪林寺にありて石碑は圓塼にして正面に明曆三年酉年正温見宜堂と刻せり他に子孫の墓碑多くあり見宜著述

日記中棟方 譯雲林神穀 撮要方 正温方 青囊真方

### 稻生恒軒

名は屈顯字は謙甫碑文に據る近世叢語に名正治字見茂とあるは前名ならん歟大阪の人本氏は波波伯部出て外祖母稻生氏の家を繼けり醫を古

林見宜に學ひ研精覃思殆と寢食を忘る見宜人を得たりとして畢く秘旨を授く業成て江戸に往く淀城主永井右近大夫尙征其名を聞て之を聘召す封を丹後の宮津に移すに及て恒軒之に従ふ世子尙長襲封に及て恩遇益優なり延寶三年老を告く是時藩主學舎を興して吏民に教ふ因て學舎の側に宅を給し常に舍に就て道義を講せしむ六年病を以て大阪に歸る同八年正月廿六日歿年七十一遺命して葬儀一に古禮を用ふ墓は小橋寺町天龍院にあり恒軒性行敦篤孝順にして節約なれとも族人故舊の貧乏なるものを賑はして吝惜する所なし晩年最も通鑑綱目大學衍義朱子家禮心經等を好み祁寒隆暑といへとも嘗て書を廢せず常に晩學歲月の挽かたきを恨み日に子弟を教へ勵まし示すに學術の要領を以てす子弟醫術を傳へ受けんと欲するものあれば曰く我幼くして家貧く親を養ふ能はさるか故に醫となれり幸にして病機を洞にし藥性を暗し世に信せら



れ族人をして初志を遂ぐることを得たり是親に奉するの誠に因れり若し醫を學んで精しからされは適ま人を害せんとす況や經術の學ふ可きあり何ぞ醫を以てせんと皆許さすとなん蝨斯艸を著す三子長集義次重虎次正路集義正路宮津に仕ふ後集義名を宜義と改め加賀に仕ふ物産の大家若水是なり

北山壽安 北山李庵

名は道長通稱壽安友松子と號す長崎の人父馬榮字は支那閩の人長崎に來り丸山の游女に會して産る所なりと云醫を以て出身せしときその系圖を問はるゝに長崎丸山遊女の子とのみ書付て出したる器量を世に稱せしとそ少より支那語を善し歸化僧化林獨立の二人に就て醫を學ぶ未だ三十ならずして京師に出て諸侯の爲に賓をもて優待せらる當時の諸醫皆東垣丹溪の窩窟を出ること能はざる間に張仲景の長を規範とし下

も明末の諸家をも採て佐使とす多能にして卜筮風鑑地理星命の學の如きも門人の才を量て是を誨ふ其人となり名を名とせず利を利とせず能く善を嘉し能く惡を惡む心剛にして方正なれば富貴の家の藥謝に於ては黄金多からされは納れす貧窮の者には藥のみならず米錢をも施しぬかゝれば家貧く萬たらはねと煩とせず債を乞ふもの來る時は此頃の療治貧家のみなれば物とらす頓て大人の病を癒して後償なはん夫までは待へしと何の會釋もなく大聲して言ひはなせは風狂人とのみいび傳ふさるにある時尾州侯の辟に應して疾を癒したれば門に札を建て、此度名護屋侯の御病氣醫療し奉り早速平癒し給ふ故金銀多く頂戴申候古借の面々書出しを以て取に來るへし北山壽安と記しける其風采想ふべし人諮詢することあれば親疎を別たす之を告げ其非を見ては靚面に辨明し其誤を聞ては含糊するに忍びす直に討論



す故に世醫或は狂とし或は直とし且譽且毀るとかや元祿十四年辛巳三月十五日歿墓は天王寺寺町太平寺にあり生前に等身の不動の石像を造て墓表とす其背に自ら銘を録して云

等身石像爾生前是誰吾死後是誰爾截斷死和生爾吾空也耳 北山友松子

竝題

此像の背の火炎風に吹かれたる如くなれば世に風吹の不動と云はやし  
て壽安の墓なる事はしらす詣る人多し寺僧言壽安嘗て紀伊侯の病を療  
して癒ければ多く金銀を興へられたりしに受すして庭前にある石を乞  
ひ請けて之を以て不動を刻せしめしなりと法號を仁壽山馬道長友松居  
士といふ壽安の子道修仁壽庵と號す業を嗣て文雅を好むこの家近世に  
至りて絶たりとなん

壽安一日暮の話

我世にいへる一日暮しといふことを覺悟せしより精神甚すこやかに  
して亦養ひに術を得たりいかんとなれば一日は千歳萬歳のはじめな  
れは一日を能く養ふ事を得たれば生涯を養ふも亦難きにあらず其日  
一日を暮す程の勤をなせば其日過ぎなり然るを明日はごふしてかふ  
してとまた來りもせぬ事を苦にしてしかも明日と思ふ心に奪はれ其  
日もおこたりかちになり又明日に至れば復其明日を思案するは始終  
持越になりて今日をなきものにおもふゆるるにいつも心氣を遠きに費  
し精神を徒にするなり兎角あすの命の程は覺束なしさいへはとて今  
日の産業粗末にせよとはあらず今日一日のつとめとおもふて勵み  
行ふへしたとへいかなる苦みとても一日とおもへば堪へられぬこと  
あるまし樂みも亦一日とおもへば耽ること有まじきなり愚かなるも  
の、親に事ふる年月長しとおもふ故不孝にも至るなり君に忠をなす



もまた是に同じ今日一日とおもへは退屈は有るまじ所謂日に新にし  
て亦日に新たなりとのたまいしごとく一日と思ふて勤むれば百萬年  
勤るも安し何事も一生せねはならぬとおもふゆへ大儀なり一生とい  
ふは永きやうにおもへと即今のことやら明日のことやら一年二年乃  
至百年後の事やらたれもしる人あるまじ死を限りに一日一日と思へ  
は一生にまさられました或人の曰凡人間一大事は今日のこゝろなり今日  
おろそかにして來日あることなしすべての人遠きをおもひはかれと  
も的面の所をしらず

李菴名は正堅字は脩身本姓は橘河州の人幼より古を好み兼て濟世の志  
あり既に長して醫となり業を北山壽安に受け悉く其家方を授けられ併  
せて其北山姓をも授けらる杏林以て榮とす當時の巨擘なり享保の初播  
州姫路城主榊原氏其妙技を聞き徵て侍醫と爲す寵遇最厚く廩祿も亦重

し數年辭して大阪に歸住す其性撲實剛毅其學問に於ける勇往直前人其  
進むを見る未だ嘗て其退くを見ず平素自ら修め人を教ふる常人及ぶ能は  
ざる所あり享保十四年己酉閏九月二十五日歿享年七十七墓は天王寺寺  
町天鷲寺にあり碑文は穗積以實撰書は東竹堂なりと云

### 寺島良安

良安字は尙順杏林堂と號す浪華の人醫を業とす法橋に叙せらる博學に  
して和漢三才圖會百五卷を著し正徳年間書成りて其名高し其他三才諸  
神本紀濟世寶を著す

### 川井立牧 弟了節

名は雍字は子和立牧と稱し桂山と號す大阪の人醫を業として名聲あり  
性穎敏強記にして和漢儒佛の書涉覽せざることなし詩は梁田蛻巖を師  
とし和歌は有賀長因を師として皆能名あり自ら作る所を輯して和歌を



桂山集詩を大橋集と云ふ又古史和歌通四卷を著して日本紀の謬を訂し  
瑣言五卷古歌詞の解難きを汎釋す旁ら參禪して僧雲門と游ひ全機居士  
と號す明和三年丙戌七月二十日歿年五十九墓は八丁目寺町西光寺にあ  
り碑文は友人三宅春樓撰并書立牧の詩

夏夜小集得深字

高堂同避暑况復結交深、風色生細簾、泉聲和夜琴、行杯螢照席、移燭鳥驚林、  
徹曉不須去、聊酬投轄心、

了節名は温字は子玉白連と號す了節と稱す其詩

首夏雜興

蠶豆花開大麥肥、南風此日換春衣、紛々蝴蝶毀垣裡、仍向殘紅樹底飛

永富獨嘯庵

名は鳳字は朝陽通稱昌安後鳳介と改む長門豊浦の人本姓勝原氏赤馬か

關の醫家永富友庵の養子となり其姓を冒す獨嘯菴生れなからにして逸  
才あり年十三の時萩の醫師井上氏に従ひ業を受け又經術を山縣周南に  
受く明年去りて江戸に往き諸家の門に游ひ當時醫人の弊風を見て厭棄  
の心あり十七歲國に還り復周南の門に游ひ益醫を厭の心ありて常に儒  
業を講せり既にして京師香川秀菴山脇東洋か古醫法を唱ふるを聞き乃  
ち京師に入り一たび東洋を見て大に悦ひ歸する所を得たりとし因て留  
學すること一年汗下の方を受け二十一歳山脇仲陶と同じく越前の奥村  
良竹に就て吐方を受け始めて汗吐下の三方全備して其術大に進みたれ  
とも之を屑とせず甚經世の術を喜び凡事の經世に關するものは意を潜  
め心を盡さゝることなし以爲らく身に藏する所以て時務を濟ふ可けれ  
は足れり一道一藝を以て名あるは我爲すことを屑とせざるなり然れど  
も家に恒産なし故に醫を以て業と爲す其言に曰道を學ふは志なり醫を



行ふは業なり志を以て業を廢せず業の爲めに志を棄てず志勉めざる可からず業精しからざる可からずと其東洋の塾にある日長崎の人飛鳥翰といへると相知り之と製糖の事を談するに翰か曰郷里に長慶と云ふ者あり最其製法に精しく嘗て唐人より受傳へたりと嘯庵人を遣して之を招き兄某と同しく之に就て製糖の法を學へり後尾州侯に説て名古屋に於て肇始す其精なること唐製に踰へ四方に廣まり大に利倍を獲て其地を裨益し藥肆糖店暴に富むものあり兄其郷に歸て之を萩にて製せり是より先に幕府命して長崎平戸五島の諸國をして製糖せしめしか其法精しからざるを以て罷みたり後僅數年にして尾長の産四方に流布せしより幕府其姦曲あるを疑ひ寶曆六年丙子有司を長州に下して其製法を按檢せしむ長藩驚き騒きて藩の爲め不利なりとし急に兄を捕へて禁錮し又嘯庵を召して相ともに幽囚せり既にして有司其製法を檢覈するに

至り嘯庵悉く其法を示して民間を利益すること數條を極言す有司其精練世に便なるを見て直に幕府に報す幕府命して幽囚を免せしめ後日賞するに白銀を以し且關東山陽諸州其法を頒布して製造せしむ嘯庵幽囚せらるゝこと三個月にして放歸せらる是より薙髮して嘯庵と稱す時に年二十五なり平生游を好み足跡諸州に遍く一歲の中京に居ること半にして大阪伏見奈良萩長崎岐阜江戸名古屋等を屢往來し其間に沈痼滯廢の病を治療すること勝て計ふ可からず然れとも一所に久しく居るを好まず此の如きこと五六年の後大阪に僑居し醫を爲すの志始て定まり經史を講説することを罷む其醫名吉益東洞と雁行して遠近に喧傳せり初東洋の門下にありし日より其名京師に聞へ某侯三百石を以て之を聘せんとするに固く辭せり後浪華に僑居する日屢人祿仕を勸むれとも皆之を辭し遂に其煩に堪へず生涯拚潦倒世事甘浮沈の一聯句を壁



上に書して羈絆すへからざるを示せり又其居る所の室に乾坤容我豪との五字の横額を懸て之を愛重し自謂ふ吾意匠此五字の外に出すと平素多病にして狀貌婦人の如くなれとも資性豪放にして好て曠達自縦の行を爲し豪飲升酒を盡し其沈醉毎に友人の至るあれば新知舊識を論せず必挽て飲ましめ飲む能はざるものも之を強て其醉嘔するに至らされは止ます常に山鹿因山熊澤蕃山伊藤仁齋荻生徂徠の四人を追慕して曰く我國慶元以來大豪傑の士僅に四人のみ恨くは之と世を同ふして吾心腸を吐露せざるなりと寶曆中江戸に志道軒と云ふ者あり肆を開て太平記難波戰記等を談講し古に托して當世を風刺し尤談論に長せり獨嘯菴江戸に遊び其肆に至り太閤記を講するを聞て姓名を通し屢交游す志道軒獨嘯菴より長すること三十九歳なれとも後進を以て視す大に其奇才を愛して其志す所を獎成して曰く我調舌を以て口腹を糊すること殆二十

年なれとも與に語るへき者なし今子を獲たるは我大幸なりと因て高議して及ふ可からざるは卑論の功あるに若かさるを説く獨嘯菴其の言の雋逸悲壯なるに服せり獨嘯菴明和元年より痰喘を憂ふれとも未嘗て其業を廢せず遂に三年丙戌三月五日を以て歿す年三十五墓は天王寺村藏鷺菴にあり碑文は筑前龜井鑑撰浪華篠崎應道書題額は龜井道戴の弟宗暉なり獨嘯菴二子長男名は友字は充國龜山と號す通稱は數馬五島侯に仕ふ二男通稱又内大阪與力西尾氏を嗣と云

著述

吐方考 漫遊雜記 甲乙篇 囊語 葆光秘祿 微瘡口訣

### 林一鳥

名は忠久福田氏奥州岩城の人少より醫術に志あり十九歳の時江戸に出て田中元東に従ふて醫業を受く後元東病に臥すこと十三年忠久代りて



其家事を執り家人十餘皆依頼す正徳三年家人と隙有り辭し去跡を晦まし姓名を林左膳と改む或時某の畫帖に和歌を賛せしものを見て其歌意に感し數年の後なほ追憶し遂に改めて一鳥と稱せり一鳥醫術特異才も亦得易からず諸侯禮を具へて之を聘せんとす一鳥曰く吾豈五斗米の爲めに初志を變せんやと辭して應せず平素探勝の癖あり奥の松島及象潟の間に游ひ留ること數年其地邊僻にして貧民の重病に罹るものあれとも嘗て藥を服せず坐して死を待つもの往々あり一鳥深く憫みて藥を與へ施療すること尠からず享保十五年山名因幡守に従ひて大阪に来る時に大阪城中衛戍者の水腫に罹るもの衆し治方一に古轍に依て驗あらず因州之を憂ひて一鳥をして考案せしむ一鳥潜思して一方を索出し之を患者に試用するに其驗神の如く爾來三十餘年其方を以て其病を治するに萬一失無しと故に名聲廣く聞へて公侯より士庶に至り治を求むるも

の甚多し明石侯廩食を給して身を終ふ後大阪錦町に卜居す身市井にあるれとも高風逸韻流俗に異なり其好む所四曰く醫書畫和歌常に此四のものを以て優游怡養す明和五年戊子四月廿一日病歿す年八十九墓は蛇坂春陽軒に有り碑文は沙門蒙光撰義子叔雄家を嗣く

### 戸田旭山

名は齋字は旭山无關子又百卉園と號す通名齋宮備前の人浪華に来て醫を業とす門に艸醫戸田齋宮と標せるもめつらし或は唐服に似たるものを着て劔を負て歩しこともありしとなり本艸に委しく醫生のみならず好事の士門人となれるもの多し香川太仲秀菴か藥選を難して非藥選を著し印行すしかれとも又秀菴の才を愛して其子は之か門生とせり醫療元より能すと雖病客十人に限て此數闕されはまた他人を療することなし故に貧なりある時攝津高槻近邑の豪農物産の門人にて常に入出入する



人其母の病の診察をこふ請に應して至りしか不起の症なれば辭して歸らんとする時近隣又親族の病人これかれの診察を乞ふ四五人は診したれとも遠く迎ふる人なれば此折を幸に治をこふ者多しこゝに於て戸田氏怒を發し主人に對しのゝしりていふ子は不孝ものなり不起の母を題してえもしれぬ人々の醫治をせしめんとするかと元來癩症にてよく怒る人なれば大に顔色を損したればやうくになためて謝してかへせり其後横堀邊にてやらん磁器を買んとてある店に立よりしに内より一老婆出て戸田氏を見てさめくと泣く驚て何事そといへは婆言公はしり給はぬ事なれば不思議と思しめさん吾さきに愛せる孫ありて病重かりしかは公を迎へしに十人に限りたまう病人闕なしとておはしまさゝりしかは孫は終に身まかりぬ時節とてもあるへけれとももし公の手を経たらば生もし侍らんと思へは公のお顔を見るにつけてうらめしとて

涙せきあへすこゝにして戸田氏甚感慨して曰く吾あやまてりあやまてりもとより數人に心を配りかたしと雖十人と數を限れるは吾あやまりなり然れとも吾老ぬ今さら此限をこへは老て利を貪る心生すといはれんも口惜し吾は是にてはてんといひしとそ明和六年己丑二月廿八日歿口繩坂法岩寺過去帳に無悶居士戸田齋とあれとも墓碑見えす

足立榮菴 大矢尙齋

名は安正字は伊介通稱榮菴播州姫路の人父祖磨刀を業とす榮菴幼き時自ら謂ふ何ぞ此人を傷けるものを以て業とせんと醫となるの志あり長して京師に出て後藤良山の門に入て醫を學ぶ良山之を愛して側を離さす業成て浪華に遊ぶ會ま良山の嗣椿菴歿して遺孤尙幼し家人榮菴に請て之を翼成せしむ榮菴慨然之を諾して後を承攝し盡心竭慮其家の爲めに綏寧を致せり三年辭して國に還り母を奉して復浪華に遊び遂に居を



定む醫大に振ひ從游の者益多し人と爲り温厚質直父母に仕て至孝を以て稱せらる妻妾なし晩年閑を樂み故舊を訪問して居所を定めず山水を探て四方に周游す到る處診治を乞ふ者群を爲す明治六年己丑三月十五日大矢尙齋の家に歿す年七十七遺命により姫路の先螢に反し葬る門生故舊遺服を難波瑞龍寺に葬り遺愛碑を建つ文は平安後藤敏撰書は浪華加藤景範也

尙齋名は弼字は丈介尙齋は其號越前粟田部の人京師に出て後藤椿菴の門に入る椿菴歿して足立榮菴を師として事ふ榮菴其穎悟秀發を愛して之を視ること子の如し榮菴の浪華に居を移すや尙齋も從ふて移る或人榮菴の嗣子なきを見て妻妾を蓄へんことをすゝむるに榮菴辭していふ吾幸に墳墓は守る者あり緒業は尙齋あり吾又何を憾みんと其意は尙齋の已に於ける猶已か艮山に於けるか如くなるへしと尙齋の醫術に精し

きを見るべし尙齋の浪華に醫術を開ける始め家計微々たり岡光房其女の贅婿にせんとして榮菴に謀る榮菴之を勸む尙齋聽かす一家を成して其女を娶れり醫名益聞え治を乞ふ者門に滿つ人と爲り温恭精勤にして施與を喜ひ平生他の嗜好なし獨醫事に夙夜し地を城東に買ふて憩息の處とす百卉園と名つく安永二年癸巳三月十六日歿す享年四十八墓は口繩坂淨春寺に在り碑文片山北海撰書は年岐純なり

### 山内南洲

伊勢の人大阪に住す明和七年八月八日歿年六十三墓は小橋無量寺に在り傷寒分類證治采封醫方綱醫案集を著す

### 島田淇竹

名は知義字は謹隆大阪の醫也甚酒を嗜みて常に其友數人と往來游宴世務を意とせず或は之を諫れば曰く咄今日如何なるときそや太平百年陰



陽調和し農には餘粟あり官は酒をしめ賣せず律に飲酒の禁なく醉人道に叫ぶも役人之を呵せず是天より我輩に賜ふ所なり家内の古毛氈までも酒に換へて飲むへき時なりと益其友と日夕酣飲して身を終れり然れとも其人慷慨人の急に赴きて我は難を忘れ人の窮を恤みては我之を忘る故を以て人も亦愛敬せり

### 田中杏亭

名は雄字は子飛周安と稱し晩年杏亭と號す奈良の人少して大阪に出て叔父友安に従て小兒科を學ひ常に側に侍して孝悌志を盡す叔父其の精力人に超ゆるを見て家秘の禁方までも悉く之を授け其身老て子幼なるを以て杏亭を義子とし屬するに後事を以てす友安歿後杏亭遺孤を愛育して成立にいたり家を嗣かしめ自ら瓦町に小宅を營み別居して業を開く治を乞ふ者門に盈ち浪華百年間小兒科の盛なる他に比すへき者なし

晩年加州侯其名効をきゝて厚幣を以て之を聘すること再三に及ぶも衰病と稱して應せず性沈雄にして人と交り和柔門人恩に懷き室に入るもの多し暇日には山水を探訪し或は時事に感憤して詩歌連歌を作て興を寄せ親族を賑し寒簑を問ひて徳色なし然れとも富貴の家時勢を挾みて迎へんとすれば勃然去て顧みず二親奈良にあり孝養懈たらず十里の外より甘言を奉して絶えず安永九年庚子四月晦日病歿年六十四墓は下寺町光明寺にあり碑文は奥田元繼撰

### 沼嘯翁

名は晋字は文進其先泉州沼村の人本姓梅本嘯翁生なからにして穎敏業を香川脩菴に受け後藤長山の醫統を承く人と爲り恢郭氣を負ひて瑣細のことに拘はらず傲邁にしして志を降さず富強を抑へ貧弱を起す其技を施すや堅く門戸を守て旁徑に由らず診察精到功を奏すること神の如



し業大に行はれ弟子塾に満ち浪華にて後藤氏の業を唱ふるもの其盛なるに及ふものなし諸侯厚幣を以て徴せとも拒て應せず又之を難すれば曰く病者の我家に来るもの毎日百人に垂んとす其中危篤の者も多し今此ものを捨て、遠きに往くに忍んや且吾豈厚幣の爲に技を售んやと常に早晨より業を執り日暮に至て息ふ其燕居の時には賓客門生を聚めて置酒高談し談竭きぬれば之を強て鬼神幻虚を説かしむ母に事へて侍養至らざるなし故に四十餘年間外にて宿泊せず母歿して哀毀殊に深しこれより意を刀圭に絶ち志を名山大澤に肆にせんとして未だ果さず一年ならずして歿す天明元年辛丑十月十八日也享年六十一天王寺の側龍泉寺に葬る今寺廢して墓見えす

### 水走平岡

河内平岡の人醫術に達す著述の書方苑診視要訣、病徵方義等あり文化十

二年乙亥五月七日歿年六十三野中遍明院に葬る

### 村上玄治

名は景吉字は玄治相長軒と號す大阪の人醫名有り得一餘訓を著す晚年佛に歸し權大僧都德海を師とし深造する所あり自志趣の存する所を述へ和歌二首を作る

彌陀の國何方なりと尋ぬれば磨く心の内にこそあれ  
行末を問へは昔の花の旅また歸りこぬ春を樂しき

歿年詳ならず墓は八丁目寺町大念寺にあり碑面南無阿彌陀佛の六字は趙陶齋の書碑陰文は銀青光祿大夫源具選岩倉歟撰並書なり享和三年癸亥九月廿一日とあり

### 各務文獻

文獻字は子微相二と稱し歸一堂と號す大阪の人人となり瑰偉倜儻細節



に拘らす嘗て曰く我れ吾業に於て決して他人の門牆に倚らすと又謂ふ事は民を救ふより大なるは無く功は世を補ふより深きはなし今世は太平にして士の功名を事とすへきものなし救補をなす可きもの唯醫術のみならんか中頃微にして今又熾なるものは古醫方なり古く混ひて今に行はるゝものは産科なり古無くして今も行はれざるものは整骨術なり此三つのもの未だ集めて大成せしものあるを聞かす我遺を拾ひ闕を補ひ以て救補の一方に備へんと乃ち古醫方を研究すること數年にして云ふ是空論にして徒に世醫と論争するのみ如かす産科を修めて日用に切なるにはと是時京師の専門家某大阪に寓するあり文献就て術を問ひ盡く其秘蘊を得たり其遏崩救痼の諸治法に於ては別に發明する所あり遂に救産器八種を創造す然れとも尙あきたらすして謂ふ難産を救ふの術今唯一の活鉤あるのみ是れ賀川子玄の舊套を守るものにして未だ足れ

りとす可からすとこゝに於て又整骨術に覃思すること數年にして謂ふ世の此術を業とするもの往々支那の舊法を墨守して閑議空辨に誑かさる焉んそ能く骨節の理を發明せんやと自ら刑屍を解剖して之を實驗すること數十回其運轉機能の理を推究し或は器械を製して治方を便にし或は繃帶を施して搖動を護す其器械繃帶等の法大抵皆其創意より出たり嘗て工人に命して木を以て人體骨格を作らせ常に座側に置て諸生業を問ふものをして手撫し目察し其機關を曉らしむ後遂に整骨新書主卷を著し附するに全體の圖を以てす其說西洋法を以て準とすれとも其神會獨得する所も頗る多し當時大槻玄澤重訂解體新書を著し其書中文獻木像骨格の事を記して其眞に逼ることを稱せり文献の死體を解視するや夜分妻を携て葭洲に赴き刑死の棄屍を收め夫妻之を昇て歸り竊に床下に置きて剖檢せりと葭洲は安治川の下流にありて幕府時代死刑の屍



を瘞る所なり白晝と雖も人忌嫌ひて近付かざるに文献の所行を聞てみな舌を卷て驚服せしとを文化二年己卯文獻木製像骨を官に獻す官之を躋壽醫院に置き尋て賞あり同年十月十四日歿年六十五墓は口繩坂淨春寺にあり

橋本宗吉

名は鄭字は伯敏大阪の人少より蘭學を好む家貧して傘の徽號を書て業とし親を養へり宗吉かゝる賤業を爲せとも其志頗大きくつねに慨然歎して曰く男子學はされは己まん學は、群を超へて名を天下に揚くへしと寛政の初め小石玄俊大阪に在りて醫業大に行はれ専ら蘭方を唱へ間長涯天文學を研究して發明する所多しと雖二人俱に蘭の原文を讀む能はず一志士を獲て蘭書を學はしめ俱に研鑽せんと欲し宗吉を見て大に其才有て貧なるを惜み兩人議して學資家計を支辨して江戸に游學し業

を大槻玄澤に受けしむ宗吉感喜し稻村三伯山村昌永安岡玄真等と切磋琢磨し居る事數年學成て歸り醫を以て家を起す宗吉深く玄俊を徳とし力を協せて蘭書を譯し醫理を講す宗吉名顯はれ從遊者多し天保七年丙申五月朔日歿年七十四八丁目寺町念佛寺に葬る同寺過去帳に車町橋本宗吉こと舜譽文雄天真居士とありて歿日享年をも載せたり墓は見えず近世名醫傳に文政十二年十一月一日邪教の獄に連座して刑死とあるは傳聞の謬なるべし著書

泰西方艸百西洋醫事集成 函二十四三方法典六唱蘭新譯地球全圖一

齋藤方策

名は淳字素行九和又孤松軒と號し方策と稱す防州東佐波郡一本松村の人幼より醫を同郡能美由庵に學ひ十九歳にして大阪に游ひ小石玄俊に師事す又京及江戸に游學研究すること六七年にして業を大阪に開き高



良齋緒方洪庵等と鼎立して頗る醫名あり解剖圖譜を著す故領主長州侯給するに秩祿を以てす大阪に住すること元の如し嘉永二年己酉十月八日歿年七十九墓は口繩坂梅舊院にあり

### 原老柳

名は健字は大行通稱左一郎攝津西宮の人なり人と爲り豪爽磊落にして邊幅を修めず酒を嗜み客を愛し交る所儒流畫人茶博棋客より俳優力士に至り皆酒を飲むものにあらざるはなし頼山陽篠崎小竹と最も親しくせり初め播州の村上玄齡に就て醫を學ひ業成て歸り伊丹に卜居す會ま一の篤疾者あり老柳の治療を乞ひ又京都の新宮涼庭を招て診察せしめ主治醫と面議せんことを請ふ涼庭頭を掉て曰く僻郷の庸醫何ぞ語るに足らんやと言葉未だ畢らざるに偶ま老柳來て席に就く主人之を紹介す老柳進て姓名を通し備に其診療處法を述へ詳明適確毫も間然するなし

涼庭覺へす脾を拊て曰く鄙意もまたかくの如し乃ち主人に諭して専ら其治療を受けしむ是に於て涼庭大に老柳を器量ありとし之に謂て曰く君の伎倆を以て此鄙野に伏す豈惜からすやなんそ業を大都に張り其挾む所を施さる僕不敏と雖も之をたすけんと老柳深く其厚意を謝し襟を披いて縦談夜半に及へり幾ならずして浪華に徙り業を開く此時高良齋齋藤方策緒方洪庵等府下に鼎峙す老柳其間に起り別に一幟を建つ既にして業行はれ名著はる平生義俠を以て自負し好て人の窮難を救ひ財を見ること土瓦の如し出入償はす負債山を成し妻孥諫むれとも顧みざるなり涼庭其窮を聞き妻をして其状を見せしむ歸り報して曰く其室に入れば大燭晝の如くに爐火人をして汗を流さしめ雜賓は席に滿ち酣飲甚樂めりと老柳嘗て尼崎侯の招きに應して其世子の疾を診せし時近侍病床を環て謹み坐せり老柳毫も顧みず言語粗野尋常小兒を診視するか



如し又其友田邊某の疾を治療して洪庵と議論合はす老柳強辨して屈せず某小竹に依頼して和解せしことあり其簡傲概ね此の如し然れとも少しも芥蒂なきを以て人之を多しとす洪庵良齋等皆推して先生と稱せり技藝多く詩文棋書和歌雜俳往々其妙境にいたれり老柳疎放なれとも診病の一事に至ては殊に慎重せり嘗て一奇患者を視て其の治方を思へとも得さりしかは終夜燈の前に跪坐して蚊の背に聚り刺すをも覺えざりしと安政元年甲寅六月十四日熱を病て歿年七十二墓は生玉寺町齡延寺にあり石刻の肖像を以て標となせり述懐の詩一首を録す其人となりを見る可し

仰天不用問行藏、世味苦甘吾飽嘗、數圃荒園餘樂艸、半床奇帙富神方、誠心竊欲爲醫聖、放膽何嫌呼酒狂、引滿笑看飢鼠輩、蔑人屢上綠沈槍、

### 緒方洪庵

名は章字は公裁洪庵又華陰と號す洪庵を以て行はる本姓緒方氏其先豊後の佐伯に住めるを以て佐伯を氏とす後備中に徙り足守藩主木下氏に仕ふ父を惟因といふ洪庵は其末男なり父大阪藩邸の留守たりしかは改めて和蘭醫方を學へり幾はくならずして父の事に坐して免職せられて國に歸り兄も亦貶黜せられしかは洪庵學資を得る所なく再び大阪に出て蘭醫中天游の家に食客となること四年にして譯書は略讀せしも心未だ足れりとせず江戸に出て師を求めんと欲し脱走して東し途中衣を賣り刀を鬻て旅費に充て困窮甚しく直に江戸に入ることを得す迂路上總に至り或る寺に投して宿を乞ふに寺僧其嚴冬に單衣を着て一書囊を負へるを見憫みて一宿を許しけり談話其業とする所を問ふに及び洪庵囊中より西洋曆象新書を出して之を演說すること明瞭にして流るゝか如し僧之を奇とし近隣の醫者を呼集めて其の説を聽くこと數日若干の謝金



を獲衣装を整へ遂に江戸に入り首として坪井誠軒の門に至り蘭書を習讀せり貧にして書を買ふの力なければ人より借りて之を寫し日夜勵精刻苦して懈らす同塾生能く及ぶものなし誠軒之を喜みし衣食を給し接客のことを掌らせ懇切に教誘せり後又宇田川榛齋の門に出入して藥物本艸を講習せしかとも數學に通し尤も度量の沿革に精しかりしかは榛齋か遠西醫方名物考を著はす時助力せしこと少からす其後長崎に遊ひ蘭醫に親灸して疑を質し其濫奥を究むることを得たり此頃從學するもの日々に多かりしか弟子を率ひて大阪に出て業を開て本姓に復し緒方を稱す時に二十八歳也これより聲名次第に興りしかは木下家より擢て侍醫となし大阪に住すること元の如くせしむ遠近より診治を求め來り學ぶ者多し嘉永年間洋醫牛痘種を携へて來る洪庵之を獲て廣く世に施さんと欲すれとも人其新奇なるを恠て信從するもの鮮し洪庵東西奔

走して人に勧め其効驗を説き官に請ふて種痘館を設け其費用を厭はず孜孜勉めて怠らす十數年を経て後遍く行はるゝに至れり安政戊午虎狼痢大に流行し病熱猛烈にして死者數しらす當時の醫者其新症なるを以て治療の法に惑ひ往々手を束ねて斃るゝを坐視する者多し洪庵晝夜力を治療に盡し又虎狼痢治準一卷を著はして未だ上梓するに遑あらず其書早く諸方に傳播す文久壬戌幕府召して侍醫となし三十口俸を給し尋て西洋醫學所頭取を兼しむ人と爲り温厚にして親に孝に師を敬し誠を以て人に接し急難に赴き他を顧みず常に力を譯述教授に用ひ初め榛齋の遺命に依て病學通論三卷を譯し後に扶氏經驗遺訓三十卷を譯して病理及治療法大に備はれり又醫學の教授に科級を設け生徒を獎勵することは洪庵より生まれり入門の弟子千を以て數へ後日大醫を以て世に鳴るもの多し旁ら和歌を好み暇あれば寄懷諷詠し名流と交はる文久三年



癸亥六月十日病歿す江戸高林寺に葬る義子拙齋義弟郁藏遺髪を大阪天満東寺町龍梅寺に瘞て碑を建つ文は肥前草場韓書は備中萩田嘯也

### 畫家

橘守國 男保國 門人國雄 橘守行 橘保春

守國又の名は有税姓橘檜村氏通稱惣兵衛後素軒と號す浪華の人なり鶴澤探山の門に入て業を受け後一家の畫法を以て世に鳴る狩野家の骨法を失はず刻板の畫に妙を得精密奇巧此人より起る刻する所數種盛に世に行はる博識にして書をも善す故に世の畫師の爲に廣く畫法を傳へ粉本に乏しからさらしめんとて精力を費し圖を巧み傍に其意を記して是を刻せしむ畫本の著述古今に比類なし其名世の知る所なり狩野土佐を始和繪の名家多しと雖も其業を己れに知るのみ守國は悉く人の爲にせ

し故に板刻畫の汚名を受けたり畫道に志あれとも書籍を見ざる俗家の者の爲には笠翁か畫傳をも委しく平假名に記して其意を得せしむ寛延元年戊辰十月十七日歿す年七十高津久成寺に葬る其描く所のもの

- 繪本通寶志十 同玉の壺五 同直指寶三 同詠物選五
- 同寫寶袋三 同鶯宿梅七 同故事談十 同畫典通考一
- 同畫志三 運筆粗畫三 本朝畫苑六 扶桑畫譜五

南都名所圖一 謠曲畫志中村三近編十 野山景五

萬歲武勇繪鑑一 有馬勝景圖一 唐土訓蒙圖彙一

享保時代刻板の密畫は唐土訓蒙圖彙を始とすへし其己前かゝる細密の板本を見る事なしと云へり

守國の男保國幼名を大助と云ふ秋筑堂と號す父の業を嗣き法眼に叙せらる寛政四年壬子二月廿三日歿年七十六父と同所に葬る



國雄俗稱酢屋平十郎皎天齋と號す守國の門人なり此人名を好まざるか故に世に知られず生涯困窮して終れり落款して世に遺せる畫もなければ人其名を知らず其畫く所の毛詩圖譜の刻本世に行はる守行左近と稱す系譜詳ならず文化元年甲子二月廿日歿年五十四下寺町善龍寺に葬る

保春系譜詳ならず文化十三年丙子七月廿九日歿年六十七久成寺に葬る

大岡春卜 男春川

名は愛董字は春卜雀吶と號す大阪の人少より畫を好みて狩野氏の法を傳へ能く其秘を搜りて常師なし聲名一時に高く嵯峨親王の知を蒙り待遇甚だ渥し京坂の間人争うて畫を求む年八十を過ぎて神護寺の壁に畫けり旁ら和歌音律雜曲舞香茶の伎に至るまで通曉せざるなし然れとも甚た心を留めず嗜む所は畫に在り人と爲り寛厚にして人と交り能く完

うし尤も親族故舊に厚く困窮を救へること多し法眼に叙せらる寶曆十三年癸未六月十九日歿年八十四墓は下寺町光明寺にあり碑文は岡白駒撰男子龍書也

春川名は甫政芙蓉齋と號す字は春川以て通稱とす播州小川の人本姓有元少より浪華に出て畫を春卜に學ぶ春卜養て子と爲す遂に家を嗣ぐ能名あり嵯峨法親王及近衛公屢延招して之を褒賞す明和甲申法橋に叙せらる幾くも無くして太上皇宮成り其殿壁屏障に一時の名流を擇て畫かしむ春川も其内に在り畫成て賞賜あり時の人を榮とす人となり寛和にして喜怒色にあらわれず交際接遇物と忤ふなし上下並に歡心を得たり安永二年癸巳九月歿年五十五墓は父と同所にあり碑文は河野子龍撰並書

小柴探春齋 同景山



名は守直隼人と稱し探春齋と號す京師の人大阪に住す鶴澤探山の門人也寶曆十二年壬午三月八日歿年五十七一心寺に墓あり  
景山名は守典守直の後なり家風を學ひて善く畫けり幽深齋と號す享和元年辛酉七月十七日歿墓は下寺町善龍寺にあり

林幽甫 林幽篤

一鷺菴と號す鶴澤探山の門人大阪に住す明和七年庚寅五月十日歿田島町妙壽寺に葬る

幽篤文政二年己卯七月廿三日歿右同寺に葬る大岡春川の門人に林春二とあるは此人なるか未詳

牲川充信

襟同と號す大阪の人畫法を鶴澤探山に學ひ後一格の新意を出たす

吉村周山

名は充興探仙叟と號す牲川充信の門人にして一家を成し其名大岡春卜と並ひ稱せらるる法眼に叙せらるる大阪島内に住せり初め周次郎と稱す根附を刻し妙を得山海經列仙傳中の圖に據り其狀貌奇恠なるものに至ては世人の稱して措かざる所なり然れとも中途にして此技を止め復た之を造らす故に其造る所世に罕なるを以て人争ふて之を欣賞し之を秘して珍寶とす其作る所は都て彩色の根付にして贗物多しとそ安永五年歿下寺町光明寺に葬る男周圭業を嗣く法橋に叙せらる

櫛橋榮春齋

名は正盈大阪の人狩野派を畫く明和二年歿す

長洲

大阪の人尾形光琳の畫風を學ぶ安永天明年間の人

葛蛇玉



名は李原字は子明初名徹洞郭と號す大阪の人初め書を橘守國及雀亭禪師に學ひ後宋元の古書を模法して一家を立つ明和三年の春夜蛇玉を含み來るを夢みてより自ら蛇玉と稱せり好て鯉を畫くによりて呼鯉翁と云ふ人と爲り風流閑雅にして常に小鳥數種を蓄うて之を愛養し以て樂とす謂らく籠中にあれとも其翔集飲啄大に意匠を助くへしと本姓木村出て長島氏を嗣く長島の宗家を安八と云ふ安八の合音葛なるを以て遂に自ら葛氏と稱す安永九年庚子十月二十日歿年四十六墓は下寺町大連寺にあり碑文は片山北海撰並書なり

### 山本如春齋

名は典壽攝州西宮の人江戸の狩野榮春齋櫛橋正盈の事歟に學て能く其法を得たり京攝の間に寓居す書を需むる人甚多し天明四年甲辰六月七日歿墓は清水西坂下にあり

### 月岡雪鼎 同雪齋 同雪溪

名は昌信一に信天翁と號す通稱丹下本姓木田氏江州の人なり初め高田敬甫に從て畫法を學ふ後に南宋の諸家を摹して一家をなす大阪に住し其業大に行はる法眼に叙せらる畫く所春畫に於ては設色緻密にして古今未發の妙趣あり人心を動かすに足り人皆之を稱す又人物魚類の畫を巧にす應舉と雖も此圖に倣ひて遂に人物動物を善くせりと云ふ江田八郎右衛門雪鼎と隣家たり隱岐子遠江田を紹介して鶉の畫を求めしに雪鼎辭して曰くさきに此圖を求めしものありしかとも之を辭したり當時謂へらく吾鶉光起に及はす十年を過ぎなは及ふへきかと今年既に過れとも及ふ能はず故に辭するなりと天明六年十二月歿年七十七墓は西成郡木寺村にありと傳ふれとも未詳

雪齋は雪鼎の長男にして父の畫風を學ひ法橋に叙せらる

浪速人傑談に雪齋は雪鼎の義子



にして雪操雪洞の  
二子あり云ふ

雪溪は雪鼎の二男にして父の書風を學ひて善くせり法橋に叙せらる

菴關月 同關牛

名は德基字は子温又字原二(原一に阮に作る)を通稱とす關月又夷楊齋は  
其號なり大阪の人書を月岡雪鼎に學ふ後和漢の書を學て人物山水に長  
し遂に一家を成す其畫く所甚風致あり又詩書を善くす法橋に叙せらる  
寛政九年丁巳十月二十一日歿す年五十一墓は西成郡木寺村正通院にあ  
り伊勢名所圖會山海名産圖會は其畫く所なり

關牛は關月の子なり名は德風字は子偃天保十四年歿

桂雪典

名は常政字は雪典眉山と號し一に通神道人と號す通稱は左司馬大阪の  
人なり月岡雪鼎に學ふ花鳥を以て名ありと續諸家人物志に見ゆ曉成鐘

云初の名雪典左司馬と稱す俗稱源五郎改め宗信と稱す畫本三國志は宗  
信か描く所なりと成鐘の説明瞭ならざる所あれとも宗信の稱は安永版  
浪華丸に見ゆれば通稱たりし事疑ふへからず

耳鳥齋

俗稱松屋平三郎大阪の人初め酒造家後骨董舖を業とす鳥羽僧正古澗等  
の書風を折衷して自ら戲畫の一家を成す鬚先に蜻蛉又は雀の止まりた  
るを扇に畫きて多く賣れたりと滑稽の才ありて戲作をもなし義太夫の  
茶利淨瑠璃の名人なり平生好て河豚を食へりと云へり寛政五年歿

福原五岳

名は元素字は子絢大助と稱す備後尾道の人大阪に住す畫法を大雅堂に  
學ひて最も人物に長す世に云彭百川以來人物に冠たりと又詩書を善く  
し詩六言多く風致あり人と爲り風流洒落にして酒を好み客來れば必留



めて酒を酌み詩を賦す其京師に在りし日頼春水之を訪ふ大雅座に在て云ふ主人と高野に游ひて其山水を寫さんすと五岳春水の至るを見て酒を命して酌交はし旅装を理めす大雅もと酒を飲ますしばく催促す五岳云ふ樽を倒して止めんと頻に酌て已ます大雅筆を抜て詩を賦して曰樂聖福先生倒樽曰爲度倒樽又倒樽倒樽終無度と樂聖は五岳の堂號なり其態度想ふへし五岳別號を玉峰と云林園苑鼎春嶽濱田杏堂は此門より出たり寛政十一年己未十一月十七日歿年七十墓は下寺町源聖寺にあり五岳詩

嚴島眺望

蒼茫海氣擁珠宮、雲散三山樹抄風、七浦神燈猶未滅、一輪紅日曉霞中

墨江武禪

附兄 忠八 男 敬處

名は道寛字は子全通稱は莊藏武禪は其號又心朦齋朦齋の別號あり大

阪の人初め船頭にして天目釜彫物を學ひ妙を得たり性甚た書を好み月岡雪鼎に學て一家を成し遂に書を以て業とす山水を畫くにも一も同圖なしと云ふ平生門外に出てす畫成て後は詩文を作る酷暑祁寒には書を作らす夏月は石膏を以て假山を作る其技巧にして八方面の如し畫法より出て工夫せり常に酒を嗜む生涯清貧にして妻なし文化三年丙寅正月廿九日歿年七十三墓は天滿東寺町妙福寺にあり中井履軒か年成祿に武禪か兄忠八にかゝる記事あり其全文を擧げて附録とす

四五十年計り前の事なりし浪華の湊に河舟さす叟ありける六月二十五日の夜游客を載せたる舟さして行けるか舟おふき中にて向よりくたる舟にとり柁よと聲かけたれとさはかしき紛れに聞かすやありけんやかて打あて、叟の舟覆んとす叟大いに怒りてかけたる言を聞き



いれす人の舟を破らんとするよしや生けてはおかしと罵る先の舟のおのこは庄兵衛といふ者なり殺さは殺せと楫ひきそはめて立かゝる叟いふ各游客を載せけり己等か事にて人にうきめを見せんはひか事なりしはし待てよ此の人々をあけ返して橋の上の河洲にてまたん汝もよくして早く來れとなん心得たりとて庄兵衛も別れたりこの二人は名を得たる俠者なりとそ叟は思ふ様に人々をあけて河洲に行きされは庄兵衛先たちて待ち居たりいてやとて各楫ふりあけてたゝかひける叟は年の老たる故にや疲れて倒れけるを疊みかけて打ければやかて息たえけり橋の上にも多く見居たる中に知りたるものありて走りゆきて叟の家に告げ知らせたり叟の子忠八家に在けるか之を聞いてあな無念やとてそこなる刀をとりて走り出る月影に見れば向ふより走り來る人あり忠八を見て聲をあけていふよう我は庄兵衛なり汝か

父を殺したればやかて逃隠れんとするに汝常に親に孝ありて義あるものなればよも我をすてゝは置まじきものと思へは少し心に懸るなりこの序に汝も打殺して後に隠れんものをとて來るなり汝も親の敵打つならば我を殺せよかしといふまゝに楫ふりあけて打つて懸る忠八も刀をぬきあはせ身をかはして楫にあたらす飛入て打けるか袈裟かけに斬はなちける斯くて逃隠もせず所の者共にうちむれて官廳にいたり牢に入けるこのまゝにては即時に親の敵うちたるにて罪は少しもあるましきをこゝに不幸の幸といふ事ありかの叟一度は死たれと夜風の涼さにねちさめけるにや死骸を昇いて家に歸りける頃や息を吹出しけるすはやとて水そゝき粥食せなとしければ手足はうちをこなはれなから命は蘇りける其後官廳にて刑を議せらるゝに親は喧嘩にて傷を被りたれと死なす其子其相手を斬殺したりとて喧嘩の人



斬しといふ罪に落て忠八は首を刎られたり上下の官人みな忠八か孝烈を感じて涙を落しけれとも命を救ふこと叶はさりしとなんこれ刑名の害なりけれ庄兵衛は人を殺して刑を恐れて逃隠れんと思ひ又親の敵なればうてよと云て死したれば怨もなしや忠八もまことの親の敵と思一念にて刀にうちけるなり其後よみかへりたるはへちの事にこそまさに庄兵衛を斬りたる時は親の敵にまかひなし毛の末計りの罪はなしそれに罪をおほせて首を刎たるは刑名にあらずや今武禪とて畫をかき彫物をする者あり是も孝ある好人なり忠八か弟なりといふ(按に演戲の黒船忠右衛門獄門庄兵衛はこの事を藍本として敷演せしなるへし)

嬉遊笑覽に武禪を長田氏とす安永板浪華丸に墨江齋とあれば氏に非るか如し

敬處名字詳ならず武禪の男文化九年壬申七月五日歿墓は武禪に同じ

森永春齋

名は陽信大阪の人畫を櫛橋榮春齋に學ぶ文化五年歿す

鼎春嶽 同金城

名は元新字は世室太郎右衛門と稱す春嶽は其號なり大阪天滿の人初め福原五岳を師とし後收藏家の秘冊を探りて戸を閉ちて之を摺寫し精竭き體枯ると雖も倦をしらす田能村竹田嘗て春嶽を見て眞に篤古の士とす畫名時に高し文化八年辛未八月十三日四十六歳にして歿す墓は天滿專念寺にありといふ

金城名は鉉字は子玉大阪の人父春嶽畫を以て名あり金城生れて數月父歿せり金城頗る辛苦を極め畫を研精す岡田半江其畫を稱して鼎氏子あり春嶽瞑すへしといへり人と爲り沈黙温和にして義を親舊に失はず文



久三年癸亥五月晦歿年五十三墓は福島妙徳寺にあり

### 戸田黃山

名は光春鼎春嶽の門人大阪天満に住し酒肆を業とす人物を畫くに妙也

### 濱田杏堂

名は世憲字は子微杏堂又希庵癡仙と號す希庵を以て通稱とす本姓名和氏濱田氏に養はる醫を業とす少より書を好み初め福原五岳に學ぶ後先哲の遺跡を模して大に山水花卉を能くし畫名殊に盛なり又詩文書に至るまで苦心討究す文化十一年甲戌十二月二十二日歿年四十九墓は高津寺町法雲寺にあり碑文篠崎小竹撰森川竹窓書

### 林閔苑

名は新字は日新秀藏と稱す大阪の人五岳を師とす性慧敏にして明人の畫法を慕ひ泉州堺の豪族某の家に多く明人の畫帖を貯ふるを聞き請ひ

て屢々之を摸し遂に其風趣を得たり故に其美人を寫すの筆法纖勁にして著色鮮明略々仇英に似たり水墨人物の如きは則専ら剛勁を尙ひ張平山に似たり年未だ四十に滿たすして歿す

### 須賀尙卜

蘭休齋と號す浪華の人大岡春卜の門人文化三年丙寅十二月六日歿す生玉玄徳寺に葬る年未詳七十五歳にして畫きし畫あり

### 一峰齋馬圓

原東武の人葛飾北齋に従て學ぶ初め馬遠と號し浪華に來り大岡喜藤治の養子となり龜山町後藤屋敷に住す後改て馬圓といふ俗稱始め由平後藤二と改む小説刻本の密畫多し文化七八年の頃三月に歿すといふ

### 岡田玉山

名は尙友字は子徳大阪の人なり月岡雪鼎に學ひて人物山水花鳥に巧な



り後一家の畫風をなす近世板刻密畫の開祖にして筆力の秀てたること  
古人に比類なし名所圖會繡像讀本數百部を畫く京大阪の板刻畫は多く  
此人なり一時の高名妙手といふへし法橋に叙せらる其畫く所の書目を  
左に掲ぐ又玉山の姓を浮世繪類考に石田とせり然れとも岡田氏なるこ  
とは印譜及唐土名所圖會等にて證するに足れり石田玉山は別人なるを  
混して一人となせるなり文化九年歿年七十六

繪本太閤記自初編至七編 唐土名所圖會 楠公記玉藻談五册作畫とも 住吉名所圖會 五  
國姓爺合戰 二十四輩順拜圖會後編 琉球運記前編 伊勢物語圖會

### 石田玉山

岡田玉山の門人初め玉峯と號す後に玉山と改む印本の密畫に巧なり清  
正眞傳記不知火草紙葦芽艸紙長柄長者黃鳥墳其餘多く畫けり

### 岡田米山人 同半江

名は國字は士彦通稱彦兵衛大阪の人初め米屋を業とす依て米山人の號  
ありといふ文人畫を好み興に乗して山水花鳥を作る筆力磊落強健にし  
て一種の奇觀風致あり世人大に稱譽す文政三年庚辰八月九日歿す年七  
十五墓は東高津良專菴にあり碑の側面に與汝今離別散爲一片口字形不  
明米山人の一句を刻せり墓もとは同所直指菴にありしか明治維新後直  
指菴廢せるを以て今の所に移せりといふ

半江名は肅字は子羽半江又寒山獨松樓等の號あり通稱は宇左衛門米山  
人の男なり幼より畫を父に學ひ後明人南宗の山水を慕ひて大に修學し  
遂に一種の畫風を得たり山水花卉共に一格の風韻ありて父と俱に名聲  
高し弘化三年二月八日歿す年六十五墓は父と同所にあり

### 森周峰

名は貴信鐘秀齋と號す浪華の人初め吉村周山の門に入り後月岡雪齋に



學ぶ人物花鳥山水に長す法橋に叙せらる文政六年癸未六月廿二日歿す年八十六墓は天滿西寺町西福寺にあり

### 森祖仙 同徹山

祖仙名は守象字は叔牙攝津西宮の人初め書を狩野派の畫家如春齋に學ひて如寒齋と云又靈明菴と號す後祖仙又狙仙に改む大阪に住す猿を畫くに妙を得たり其形狀眞に逼り人をして感歎せしむ筆意圓山及四條風より出つ蓋し後此畫風變したるものならん猿の畫に名ありて雜書を見す傳へ云此人平生起居飲食共に猿の如しと是れ猿の畫の妙を賞する放言ならん(應舉と雖も動物の畫は狙仙に據ると云)門人數多あり就中金田蘆江江森祖雲森春溪森玉仙等は殊に畫を善くす平生篤行の人遺蹟世に稱譽せらる文政四年七月二十一日歿す年七十五墓は天滿西寺町西福寺にあり

徹山名は守眞字は子玄浪華の人祖仙の義子なり畫を圓山應舉に學び人物花鳥を善くす後一格をなして鳴る天保十二年歿す

### 春好齋北洲

名字詳ならず大阪の人紙商にして傍ら浮世繪を善くし俳優の似顔を摸して錦繪を出す文政中の人有名の畫人なり其師詳ならず或は北齋の門人といふ

### 高田樗堂

名は定字は子保通稱幸十郎竹泉居と號す浪華の人畫を能くす山水花鳥殊に巧なり文政中の人

### 中井藍江

名は直字伯養浪華の人關月を師とし學び尤能せり殊に人物山水に長す李龍眠牧溪雪舟を慕ふて自ら一格を出せり門人多し文詩を中井竹山に



學ひて能くし又茶道を嗜めり藍江又師古と號す通稱は養清天保元年庚寅七月廿三日歿年六十五墓は生玉覺園院に在り明治維新の後改廢して所在分明ならず

### 山口重春

浮世繪師なり初め名を國春と云後重春と改む柳齋又玉柳齋と號す通稱甚次郎長崎の人大阪に來りて島内に住す江戸初代柳川重信の門人なり俳優の似顔を能く摸し錦繪を出し小説挿繪の板下を畫く又劇場看板を畫きて名聲を發す大阪劇場の看板もと粗畫にして設色も美ならず重春之を描くに及て丹青微細全美し其後綿々畫人美を盡し方今に至る劇場看板の美艷此の人に起れり重春晚年岸岱の畫風を慕ひ時々其の風を摸す文政天保年間盛んなり其終る年詳ならず其子男女三人あり男は商となつて長崎に住し二女は大阪に住居し父に設色を學ひて業を助くと云

### 水尾龍洲

字號詳ならず初め名を卜龍と云中井藍江の門人大阪の人なり畫法正しく濃淡山水花鳥人物等の墨畫を善くし彩色も可なり天保三年歿す年四十四惜らくは其名世に發せず

### 山田蘭石

名字詳ならず中井藍江に學ぶ大阪の人

### 岡熊岳 同琴岳

名は文暉字は世昌一に名は嬰字少年俗稱勝之助一號餘香堂大阪の人始め福原五岳を師とし後其風を變す文人風を能くす天保四年癸巳十二月二十一日歿す年七十二墓は茶臼山邦福寺にあり琴岳名は敬俗稱小三郎熊岳の男天保元年庚寅九月四日父に先ち死す年三十九墓は父と同所にあり



### 西竹坡

名は白受字は采卿竹坡又醉墨主人と號す讚岐引田浦の人本姓寺嶋初め六藏と稱す幼にして孤となる郷人神崎寛齋其畫才あるを見て大阪に往き濱田杏堂に従學せしめ其費を資給す幾ならずして畫大いに進み山水花卉人物皆之を善くし風致あり三十歳の時西横堀材木屋西氏の養子となり勘右衛門と稱し大阪人となる其家西横堀に在るを以て西渠の號あり性任達洒落にして善飲善談業暇に畫を好み畫成れば或は朋友に誇り或は自ら賞し獨語獨笑常にいへらく李趙何人そや黃倪吾徒なり世人動もすれば古の人古の人と云ふ身後より之をのそけは我も亦古の人のみと故に人之を目して狂とす府下雅筵を開く毎に竹坡必す與りて其上座を占め醉に及へは人を嘲けり座を罵り喧嘩雜ゆるに滑稽を以てす一團の和氣却て座上の興を催し人之を厭はすして曰く竹坡在らされは興薄

しと平生客を愛し人至れば親疎を問はず歎歡を罄して止む交友の間慶吊問尋懇意備さに至り殊に同國の故を以て藤澤東暎と親善なり又佛を信して朝夕佛前に誦經し或は婆婦に混して念珠を揉めり天保十四年癸卯八月三日病歿す年六十五

### 仁木五彩

通稱桐柄大阪の人書畫俳諧茶事生花及び六絃琴を善くす

### 北英

大阪の人俳優似顔を善く書き錦畫を多く出し劇場看板を畫く天保中の人

### 貞升

大阪の浮世繪師なり五渡亭と號す骨董家の子にして幼より畫を好み江戸歌川初代國貞の門人となり俳優似顔を研究して妙を得天保年中有名



なり其師國貞二代の豊國と名を更むるに因り名を國升と更む後浮世繪をやめ西山芳園の門人となり四條風の畫人となる

### 上原芳豊

大阪の浮世繪師なり名は芳豊字は北粹通稱兵三歌川芳梅の門人俳優似顔錦繪劇場看板を畫きて其名高し傍ら和歌を嗜み戯れに俄をなすに頗る妙なり天保嘉永年中の人

### 松好齋

浪華の人俗稱半兵衛島内清水町に住す浮世繪を能くし又俳優の肖像を摸すに巧なり且戯作をもなす畫く所の印本あまたあり近世の名家といふ

### 林文波

名は直之方洲と號す大阪の人初め蔀關月を師とし後畫を中井藍江に學

て人物山水花鳥を能くす弘化二年三月十六日歿す年六十

### 佐々木晴洲

名字詳ならず初め中井藍江に學ひ後鎌田巖松にまなひて山水人物花鳥を能くす安政三年丙辰三月十日歿年五十四

### 金子雪操

名は大美字は不詳江戸の人幕府の士犬塚某の子なり金子氏の養子となる少き時伊勢長島城主増山河内守に仕へ近侍たり河内守正賢雪齋と號す畫をよくし花鳥に工なり大美之を學ひ其神を得たり雪齋悦て雪操の號を授けらる後仕を辭し薙髮して各半道人と號す又塵海漁者の號あり越後の釧雲泉に従ひ山水の法を受けてその妙に至る雲泉は渲染法を發明せし人なり是より先き青綠山水法ありと雖も未だ其正法を得ず雪操刻苦勵精遂に之を發明す中年京師に住し書法を加茂の書家某に學ひ未



た嘗て一日も怠たらずある日酔て御築地内を過ぎ御溝の水を掬ひ飲まんとして誤て溝に陥りしか水淺くして溺れす遂に溝側を枕として睡れり會ま巡夜の士之を見付け驚き恠みて扶け上げ其姓名理由を詰り問ひ笑ふて家に送り至る其後大阪に移り堂島櫻橋の西なる裏長屋に住居し陋隘甚しけれとも曾て意とせず塵埃の中に坐し日々古法帖を摸し畫譜を臨して悠悠自得し隣人其獨居庖厨を執る人なきを見て時々食物を餽るに己か好む所のものは之を食ひ然らされは措て顧みず碗碟狼藉腐蛆蠢々たり或人其貧困の甚しきを氣の毒に思ひ雪操に謂へらく僕一弟子を紹介せんとす其人富豪なり先生善く之を遇せは衣食の事憂ふるに足らず請ふ意を留めよと日ならずして其人を伴ひ來る雪操熟視して曰は何人そや紹介者曰是れ曩に先生に告る所の某君なり先生に従ひ畫を學はんと欲せり雪操傲然として曰く子畫を學はんと欲するか大いに好し

畫を學ぶ蘭より始むへきなり子余か畫くを見よと坐右の紙を取りて蘭を畫く曰く佳ならず又畫く又曰く未だ佳ならずと如此すること數十紙時に窓外聲あり先生在宅なりや雪操曰く阿部君(縑洲)入れ窓外曰く好風日今より某所に游はんとす游意なきや曰く妙々直に筆を投し客を揖して出行きの客茫然と爲す所を知らず遂に去て復來らず雪操貧困故の如し當時篠崎小竹の名府下に噪し文墨の客交らざるなし雪操未だ嘗て其門を叩かず特に藤澤東咳八木巽處と親善往來して驩を渴す平素好んで易理を談せり其窮乏の甚しき時は或は米を買ふ能はず數日食はさることまゝあり乃小景山水を描て巽處に乞ふて金に換ふ例小景山水十二葉に換ふるに金一分を以てせり一日巽處を訪ふて例繪を携ふ巽處留めて飲食せしめ金を與ふ雪操辭して去り天神橋を過るに月色清朗風景絶佳なり欄干に凭れて賞翫良久しく覺えず睡郷に入り人語登音に驚き覺れ



は既に黎明なり驚きて匆々立去らんとす側に乞食あり呼て曰く公睡中袋懐より抜落ちたるを拾ふてこゝにあり持去り玉へよ雪操謝して之を受け袋より昨夜書に換へし所の金を出して乞兒に與へて去る其平生の行事眞率拘はらざること往々此の如し天保八年島下郡吹田の井内左門(經雨樓と號す)雪操の人と爲りを愛し迎へて家に居らしむ因て吹田に寓すること八九年其間に髪を蓄へ妻を娶る子無し後再ひ浪華に出て釣鐘町に住す安政四年丁巳八月五日咽喉病に罹りて歿す年六十四天王寺村清壽院に墓あり雪操初め詩を大窪詩佛に學ひ從て加賀にあそぶ詩佛去て後留り居ること一二年火災に罹り少き時より貯ふる所の粉本を失ふ依て生涯粉本を藏せず其弟子を教ふるも曾て粉本を與へず各其意の欲する所をえかかして其運筆の表裏意匠の巧拙を教導誘掖す故に始て門に入るもの頗る手を下すの難きを覺ゆるも稍慣熟するに至つては其

進歩却て速かなりと平素自畫に詩を題せず或是を問へは曰く惡詩を以て畫を汚すを欲せずと又骨董家表具師等か文人墨客の間に周旋して好惡偏頗謾に人物を批評し書畫を軒輊するを惡みて之等の輩と交通せず故に畫を善くすれとも沾れす己れも亦以て意とせざるなり或曰く經雨樓主雪操を迎へて吹田に移れる時船に家具類を積めるに雜具纒かはかりの内に幾荷かを容るへき大小甕あり内に畫本法帖をはじめ垢附きたる衣類米など種々納れたるあり人之を問へは雪操曰く陋室餘地なし萬一火災あらんには之に水を滿てゝ免るゝ心なりと答へしとそ

### 鎌田巖松

名は子寛秀一と號す大阪の人森祖仙に學て巧に禽獸をえかく後中井藍江に就て人物山水花鳥を能くす安政六年己未七月廿八日歿す年六十二

### 西山芳園



名は成章通稱辰吉大阪の人書を松村景文に學て人物花鳥を能くせり京阪の間に稱譽せらる慶應三年丁卯十一月八日歿す年六十四墓は天満東寺町善導寺にあり

馬 含

名は如深如々山人と稱す黃蘗派の僧大阪の人書法一家をなす

東 亭

姓は田名は融三谷五平と稱す墨竹に名あり又書名あり大阪の人

佐野龍雲

土佐光貞の門人浪華の人法眼に叙せらる文化五年戊辰正月二十一日歿す墓は天王寺西門納骨堂後にあり

曾我紹興

名字詳ならず大阪の人曾我氏の末裔と稱す子を紹叔と云(按するに曾我

紹祥の子を紹叔と云ふ同名疑ふへし

長山孔寅 同孔直

字は子亮江園又五嶺牧齋の號あり出羽秋田の人吳月溪に學て人物を善くす大阪に住せり又鶴の屋乎佐丸の門に入り狂歌を能くす狂名三條茂佐彦頓著物語を著す嘉永二年己酉九月二十七日歿す年八十五  
孔直字は方叔孔寅の門人にして後竹外と改む文久二年壬戌正月二日歿す年六十

山中菁藻齋

名は幸直通稱鴻池屋善五郎常坦と號す浪華の人鶴澤探泉に學て人物を善くせり

菅松峰

名は伯太丹羽桃蹊の門人花卉を能くす松眞齋と號す嘉永四年辛亥十月



二十日歿す年六十二墓は生玉月江寺にあり

### 田其相

字は子玉浪華の人畫風一家頗る風致あり

### 竹原春朝齋 同春泉齋

名は信繁浪華の人大岡春卜の門人坂本春汐齋に學ひ浮世畫を以て名あり京師の秋里籬島と深く交り五畿内及諸國名所圖會の畫を多く畫けり寛政享和の頃

春泉齋は信繁の子なり名字詳ならず二十四輩順拜名所圖會、東海道名所圖會等を畫けり

### 松軒齋

天滿に僑居し能く佛像を畫き又書法を善くす常に筆墨を懷にす請求するもの多きを以てなり

### 大石眞虎

尾州の人にして初め江戸に住す畫は土佐派に出て一面を開く嘗て多く古畫卷を閲して一々之を臆に留む故に其典故史事を寫す皆據る所あり人となり疎宕にして酒失あり一客と深川小華樓に宴し醉に乗して喧鬪し障戸を破り筵席を翻掀し餘激比隣を動かし事遠近に傳ふ是に於て大に驚き大阪に奔りて非を悔ひ過を改め一意繪事を修む其畫く所は百人一首一夕話、嚴島名所圖會、神事行燈、百將傳、龜畫國風、龜畫百物等なり

### 小澤梅堂

名は敬明字は標七吳龍軒と號す別號綾丸大阪の人經學和歌及書畫を善くす通稱小澤標七

### 吉野看鶴

名は徽字は嗣宗浪華の人書畫を善くす



横川陶居

名は安定字は文辭通稱愿三良白菊舎と號す浪華の人書畫を善くす

中村芳中

平安の人浪華に住す光琳の風を慕ひ修して其趣を得たり又俳諧をもなせり

上田公長 男 公圭

字は有秋雍々と號す吳月溪の門人實は景文に書法を受く浪華の人粗畫にて風韻あり

公圭は公長の男業を繼けり萬延元年庚申九月十三日歿す

浦川公佐

公長の門人島内周防町に住す俗稱播磨屋佐兵衛

田中秋亭

公長の門人安政年間歿す清水西坂の下

松川半山

名は安信字は半山霞居翠榮堂の號あり一時秦氏に更むれとも暫時にして松川氏に復す大阪の人書家松川某の男幼にして畫を好み菅松峯の門に入りて書法を學ひ専ら桃溪玉山の畫風を慕ひて善く畫く後諸名家の書法を學ひ筆力を得板下の畫は特に微細絶妙にして他に超えたり傍ら戯作をなし其著す刊本多し

長谷川貞芳

大阪の浮世繪師なり江戸歌川國貞の門人三國英傑比較太閤記を著す

流光齋如圭 男 朴仙

浪華の人名は如圭浮世繪師にて俳優の肖像を畫くに名あり繪本信長拾遺後編の繡像は此人の筆なり男多賀子健朴仙と號す畫に巧なり壯年に



歿す

丹羽桃溪

名は元國字は伯照菰關月の門人にして畫に巧なり諸國の名所圖會を多く畫けり浪華島之内木挽中之町に住す俗稱大黒屋喜兵衛且狂歌を好て波丸の門人となり遲道と號す文政五年壬午十月十五日歿す年六十三生玉圓通寺に葬る

淺山蘆洲

浪華の人俗稱布屋忠三郎須賀蘭林齋に従ひ畫法を學ひ蘭英齋と號す後に狂畫堂蘆洲と更む浮世繪を専らとし名を得たり文政元年戊寅五月五日歿す年四十餘法號釋順清游行寺成圓院に葬る

浪華人物誌卷二終



